都の四季

747

特22
317

梅花詩

梅花詩

嵯峨宋石

謝高外史

嵯峨野

序

嵯峨野在平安城外乾位數里其為名勝地古今人所嘖嘖予不復喋喋焉自嵯峨帝嘗愛其勝後千餘年皇孫鄉相以至隱逸之士栖止于此遊息于此者世不絶其人就中後醍醐帝尤愛此地置臨川之園屢臨幸焉足利尊氏創天龍寺修帝冥福蓋以帝之愛此地也後後亀山帝御大覺寺以至於嵯亦因先帝遺愛之地耶近歳

楠新田二公之首冢發見于古寺廢趾中
乃知二公英靈亦有所歸矣因是觀之謂
嵯峨野曰南朝正氣所聚豈不可哉予有
感焉及觀小林桂陰此著為一言之若夫
溪山之奇櫻楓之勝則委好游者之觀賞
而已桂陰名吉明大覺寺門跡之世臣也
明治廿九年一月　　如意山人谷鐵臣撰并書

都は乾はしもかきしたにしるる所、山は里にさとなれと、そか
そも、とかすめら美國ハ、古く名たゝる所、山は里にさとなれと、そか
中よも、九重の花ハ都の、西山まそ、いとゝおほからめ、志かハあれ
とも、飛鳥川の淵瀬さゝめぬ、世にしあれそ、昨日の宮居も、今ふハ野
となりぬ、かたびらの辻のゝいとゝ、のきひしき籔が林も、今ハ茶の園と
なりていとそれ〳〵しくゝもみち葉にハ行幸をまちにし、小倉山も、い
つしか鹿もすまたに、秋のなかめも物たらハぬ心地そせらるゝ、かく物
かそり、星うつりて、數多の名所ゝ、人志らすなり行まそういとうらみ
なれ、こゝに小林吉明君なる人、あまたの古きハ文をもかひさくり、か
つハ又、自ら深き草むらふみをけつゝ、此處彼所を尋ねめくりていゝ一冊
の書をなし、天地のはし、地かつゝ都より、いぬゐの方にあるれハをて

是をなん、都乃乾と名つけ、こをしゝ貳巻となして、上の巻ハ、嵯峨、松尾の、春によそへて、花のまきとし、下の巻ハ、太秦、御室、高雄の秋になぞらへて、紅葉の巻とゝいふなり、是にしゝ、富岡鐵齋大人の、繪をさへ加へて、同心の人々代、尋ねめくらん枝折にもと、いとこまやかにしゝのし賜ひぬ、實にこの人々まして、まのいさはあることゝ、古明てふ名にそ、ぢぬいうべ、名ハかゝるちを、あらはす物ゆゑ、あなかしこ、

かくいふそ化野の草むらに露の命をむすびとゞる

七十路あまり四とせの驅烏僧

知足庵の主樂處ちるす

明らけく治れる御代の

世あまり九とせのむつまし月はしめつかゝ

緒言

余ハ前きに嵯峨名勝のゝをりなる小冊子を公にし其序文に於て約するに他日再ひ地方の名勝古跡を委曲世に表せんことを以てしたり此に先約を履ミ且つ叙事の範圍を擴め上下兩篇となし上篇に於て嵯峨、松尾の邊を記し下篇に於て太秦、御室並に三尾の諸名勝を叙せり而して其位置區域は平安京の西北に當るを以て題して都のいぬゐといふ抑々我地方の名勝舊跡の業湮たる事は古來天下に顯著なる所なりと雖も年代荒唐從て古書舊記の類多く散逸し去り爲めに討尋の難を感する事甚し唯二三先輩の遺書及古社寺に散存せる記錄其他古來の口碑口傳の類を蒐集し筆削して稍其梗概を得たり唯だ恐る余輩村童素と文辭に嫻はす叙事の謬劣行文の難澁殆んと讀むに堪えさるものあ

るを

寺院の緣起土俗の口碑從來忘誕無稽取るに足らざるもの尠しとせず其甚しきハ可成之を削除するに勉めたりと雖も古來萬民の信仰社會の風教に關聯するものハ余輩一家の私見を以て濫りに抹殺破却すへきに非ず故に是等ハ往々原文の儘抄錄せり

而して社寺舊跡の沿革等ハ何れも憑據する所あり私見の如きは敢て挿もなしと雖も數百に餘る箇處を列叙することなれば其間遺漏錯誤等少なからざるへし此等は他日版を重ぬるに從ひ漸次校正せんことを期す

終に臨て表章すべき一事あり余此編をなすに方り殊に嵯峨の部に於て最も參考に資せしは青護山人の嵯峨名所案内記及湛山隱士の覽跡

史是なり共に地方の名所古蹟を細大網羅せしものにして我里の爲めに少なからざる功績を殘せしものと謂ふへし青護山人は姓ハ林、名は康朗大覺寺宮の重臣なり古典に通し和歌を能くす文久二年五月齡七十有餘を以て逝く湛山其何人たるを詳にせず唯嵯峨の一隱君子にして寛政年間の人たるを知るのみ

明治二十九年丙申一月

雙湖庵破窓の下に於て編者識す

目次

○嵯峨野　一
○帶採池　一
○さゝれ石　一
○千代の古道　二
○廣澤池　二
○潛龍亭
○觀音島
○兒森　三
○遍照寺　三
○登天石　四

花の大卷

○六代丸潛居跡　四
○狹々家長孝菴跡　四
○大澤池　四
○天神島
○菊が島
○庭石
○名古曾瀧址　五
○五社明神　五
○津崎村岡碑　五
○大覺寺門跡　六
○後宇多院陵　八

○菖蒲谷池　八
○直指庵　八
○嵯峨天皇陵　九
○稱念寺　九
○觀空寺　九
○清涼寺（釋迦堂）　九
○源融公墓　一一
○斎然上人墓　一一
○藥師寺　一一
○十萬上人墓　一一
○大念佛縣碑
○遊女夕霧墓　一三
○化野念佛寺　一三
○仙翁花　一五
○二華表　一三
○清瀧川　一四
○月輪寺　一四
○渡猿橋
○時雨櫻
○空也瀧　一五
○日暮瀧
○大杉　一五

○宕神社　一五
○榕原　一七
○圓覺寺　一七
○祇王古寺　一七
○祇王墓傳
○祇王妓女潛盛墓　一六
○瀧口寺址　一九
○歌石
○新田公首塚　一九
○小倉山莊　二一
○硯の水
○定家爲家墓

○二尊院　二一
○圓光大師足引御影
○圓光大師廟各門右側墓
○小倉山　二二
○時雨亭　二二
○常寂光寺　二二
○歌仙祠
○前中書王墓
○小倉里　二三
○落柿舍（西行庵）　二三
○落柿舍記
○小傳
○去來墓

○涌蓮上人墓　廿五
○寂蓮庵跡　廿五
○裏柳社　廿五
○楠正行公首塚　廿五
○欽忠碑文
○歌詰橋　廿六
○後亀山院仙居跡　廿七
○前中書王古跡　廿八
○中書水
○野々宮　廿八
○齊宮古事
○亀尾山　廿九
○裏山
○亀山殿遺址　三十
○天龍寺　三十一
○夢窓國師小傳
○曹源池
○南北朝諸蹟
○薄馬場　三十二
○芹川　三十二
○琴聞橋　三十三
○渡月橋　三十三
○大堰神社　三十三

○臨川寺　三十四
○三會院
○臨川寺馬場
○大堰川　三十四
○大堰行幸記
○三軒家　三十六
○小督墓　三十六
○嵐山　三十七
○櫟谷
○蛇王
○藏權現祠
○戸無瀬滝湯
○花の淵
○千鳥
○香西元近城址
○大悲閣　三十九
○吉田了意小傳
○仝碑文
○大堰川上流諸名勝　四十三
○法輪寺　五十一
○西行櫻舊跡　五十二
○松尾神社　五十二
○衣手森　五十三
○月讀神社　五十三
○西芳寺　五十三
○指東巷
○曇華院　五十四

○鹿王院　五十五
○車折神社　五十六
○清原頼業公小傳
○齊宮　五十七
○有栖川　五十七
○寶樹寺　五十七
○安堵橋
○阿刀神社　五十七
○題目石　五十七
○帷子辻　五十八
○花の卷總圖　其次

紅葉の卷

○太秦廣隆寺　五十九
○地名の由來
○廣隆寺縁記
○殿舎古佛
○桂宮院
○牛祭文
○井々
○大井浚井戸
○酒神社
○木島神社　六十四
○元糺
○常磐里　六十五
○法金剛院　六十五
○待賢門院陵

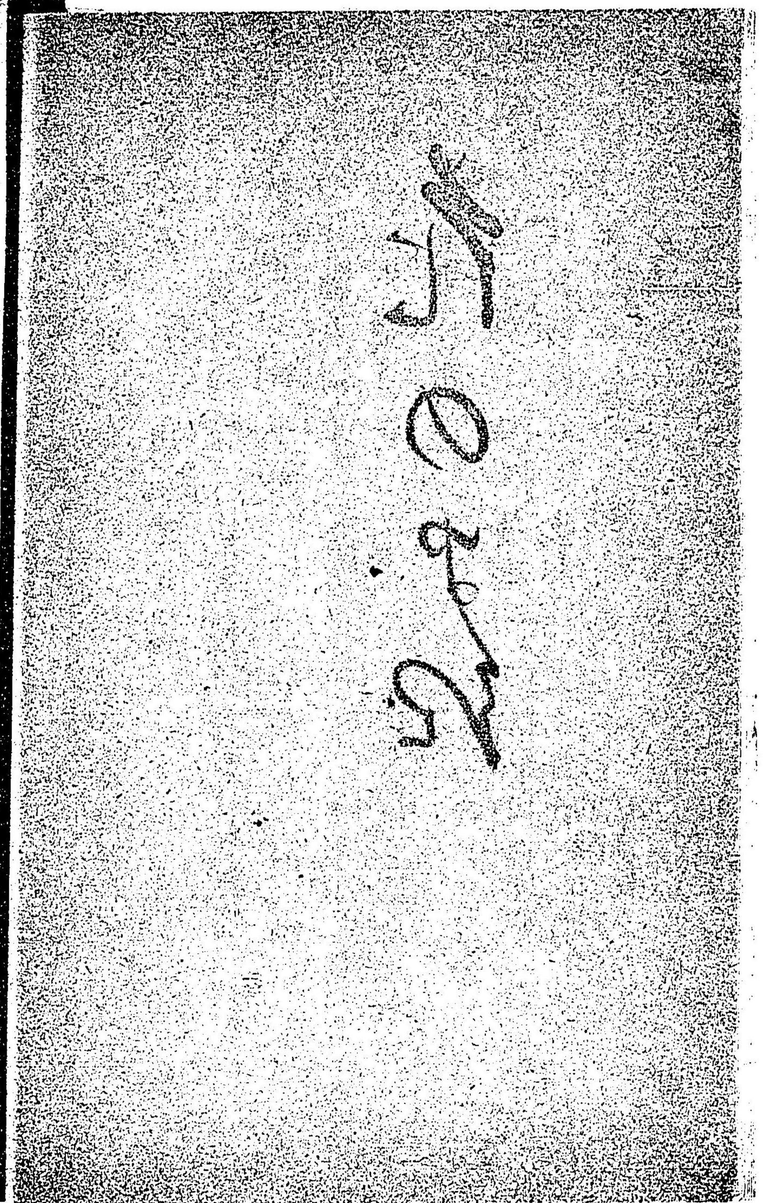
○妙心寺　六十六
○玉鳳院
○巖德殿
○雪江松
○關山國師小傳
○並岡　六十七
○兼好法師舊跡　六十八
○兼好法師小傳
○龍安寺　六十八
○義天禪師小傳
○等持院　六十九
○衣笠山　六十九
○衣笠丘御靈
○仁和寺門跡　七十
○八十八箇所　七十三
○諸帝陵　七十三
○宇多野　七十三
○福王寺神社　七十四
○鳴瀧　七十四
○了德寺（大根炊御坊）　七十四
○專念寺　七十五
○西谷上人小傳
○妙光寺　七十五
○印金堂
○法燈禪師小傳

○村上天皇陵　七十七
○泉谷西壽寺　七十七
○法藏寺　七十七
○五智山蓮華院　七十七
○三寶寺　七十九
○宅間法印墓　七十九
○宅間小傳
○平岡八幡宮　七十九
○高雄山　八十
○神護寺　八十
○鐘の銘
○地藏院の庭
○文覺と西行
○清瀧權現祠
○槇尾山西明寺　八十五
○明忍律師小傳
○栂尾山高山寺　八十六
○石水院
○明惠上人小傳
○栂尾茶山　八十八
○紅葉の卷總圖　其次

花のゆ紀

○村上天皇陵　七十七
○泉谷西壽寺　七十七
○法藏寺　七十七
○五智山蓮華院　七十七
○三寶寺　七十九
○宅間法印墓　七十九
　○宅間小傳
○平岡八幡宮　七十九
○高雄山　八十
○神護寺　八十
　○鐘の銘
　○地藏院の庭
　○文覺と西行
　○清瀧權現祠
○槇尾山西明寺　八十五
　○明忍律師小傳
○栂尾山高山寺　八十六
　○石水院
　○明惠上人小傳
○栂尾茶山　八十八
○紅葉の卷總圖　其次

花のゆ



都名所いぬゐ　花の巻

雙湖菴桂陰編述

嵯峨野　東は太秦、西は小倉山に至り、北は山嶽、南は大堰川に堺し、平濶なる一帶の野を總稱す、いつはあれど、秋の游杖、殊に佳なり、

何處秋情不可涯。嵯峨野曠近京華。影踈堤畔瀟條柳。香亂叢間爛熳花。　江吏部集

花すゝきまねゝさかと云りなからとゝまるものゝ心也けり　道命

年ごとに大宮人の來る野へは秋のさかとや花もみるらむ　朱雀院

この程やさかの御狩のあとならん野山も里もあせかはりけり　西行

きすなく嵯峨野の原のみゆきには古き跡をや先つ尋ぬらん　兼宗

名にめでゝ來れるはかりを女郎花我おちにきと人に語るな　僧正遍照

帶桜池　鳴瀧より二町西の路傍にあり、昔、此池の邊、帶に化して、行人を惱ませしと、云ひ傳ふ、

さゝれ石　此池の一町西の山頂にある巨巖なり、

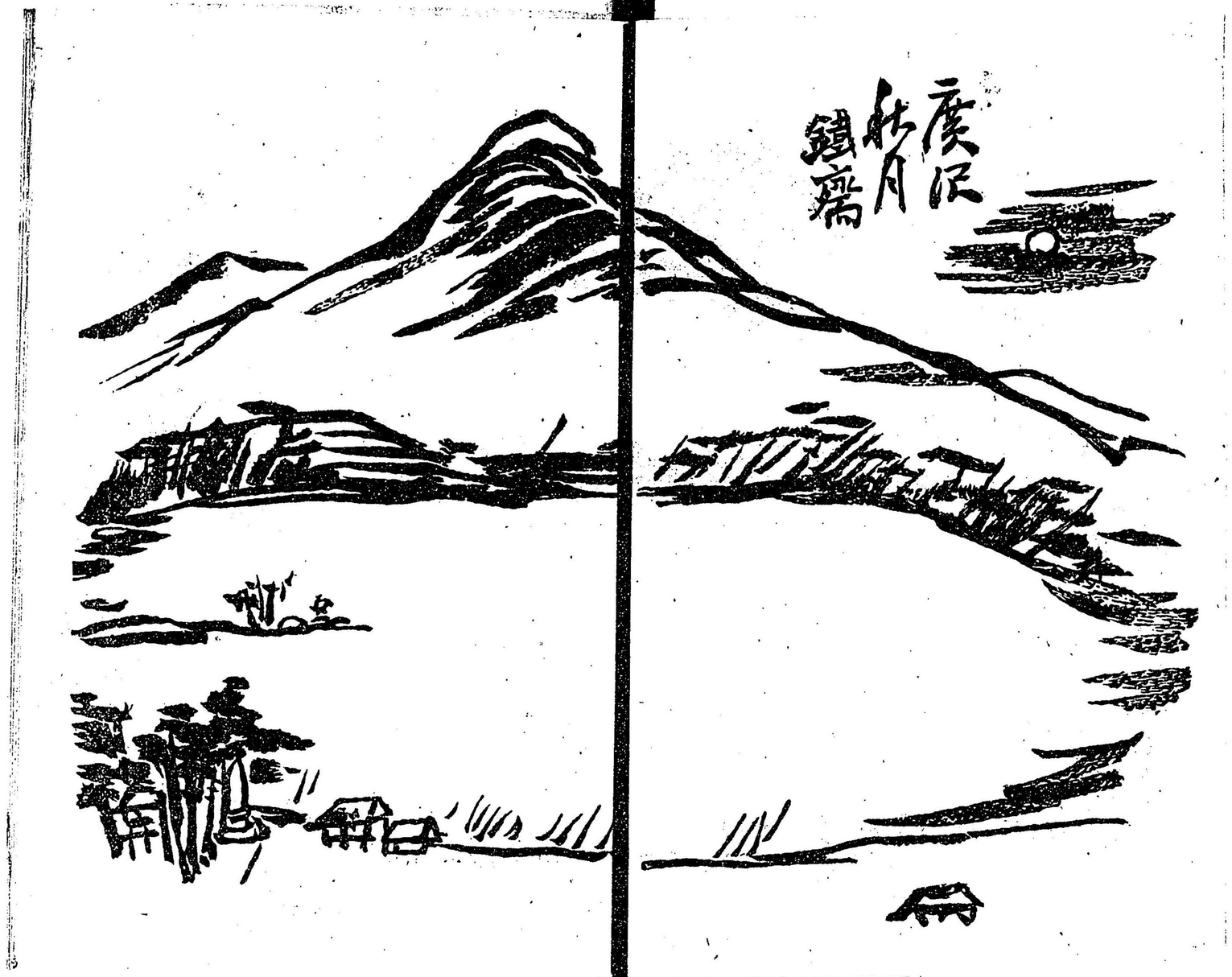
きみか代は千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまで

千代の古道　廣澤の巽、宇、山越の山麓にある、細道なり、古へ、嵯峨離宮へ、行幸の道なりしといふ

いにしへの千代のふる道年經てもなを跡ありや嵯峨の山風　後鳥羽院
今も猶みゆきのたゐしさかの山君かすみかの千代の古道　忠房
里人も千代の古道いくかへり春のさか野に若菜つむらむ　爲家
君か代の千代のふるみちふりはへて引くや子日のさかの山まつ　千蔭

廣澤池　寛朝大僧正（宇多天皇の皇孫）の穿築する處、廣さ方四町に亘る、池心に遍照寺山の、倒影を印し、古來觀月の勝地なり、又其灌漑の利を受くる水田、殆んど四十町歩の多きに達す、

いにしへの人は汀に影とめて月のみすめる廣澤の池　頼政
更科も明石もこゝにそそひきて月の光は廣澤の池　慈鎮
くまもなく月すむ夜半は廣澤の池は空にそひとつ也ける　經家
廣澤の池に宿る月影やむかしをかへす鏡なるらん　後鳥羽院
野へなから月の都とみゐにけり涙の玉しく廣澤の池　契沖
都人みね海山のおもかけも月にうかへる廣さはの池　眞淵


廣沢秋月
鐵齋

名月や池をめぐりて よもすがら　はせを

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

池の坪涯に、一草庵あり、潛龍亭と稱す、大覺寺宮、月を賞し給ひし處なり、

迎レ月開レ筵酒一壺。雲埋二清影一望總無。暗中何處可探得。知作潛龍頷下珠

又池中に一島あり、觀音島と稱す、往古遍照寺に屬し、觀月の樓などありしも、星霜の久しき、波浪の洗ひ去る所となれりしを、近頃有志の、再造せしものなり、

兒（カヒ）の森　廣澤の坪隅にあり、小祠には、寛朝僧正の侍童を祀れり、傳云、侍童、水伯の爲めに取られたりと、

廣澤山遍照寺　本尊（赤不動明王立像　弘法大師作　十一面觀世音立像　仝　作）

寛平法皇の皇孫、寛朝大僧正の開基にして、眞言宗廣澤流淵源の地なり、初め廣澤の乾にありしも、後世替廢して、池の南二町の處に移し、僅に其跡を止む、

藤原實範

對レ月適逢二三五時一。蕭然古寺感方生。最明素擇今宵色。遍照彌知此地名。

後宇多院

こゝろさし深く汲みてし廣澤の流は末も絶えじとぞおもふ

平忠度

住きけんむかしの人は影たえて宿もるものは有明の月

登天石　遍照寺山の山腹にあり、土俗の説に寛朝僧正、此石より上天せられしと、

六代丸居潛跡　廣澤の乾隅、六代芝と稱する處なり、小松三位中將惟盛の子、六代丸の隱れたりと云ひ傳ふ、

狹々乃家長孝庵址　位置多説あれど、廣澤の艮隅といふかた、信なるが如し、長孝、姓は望月、始の名は長好、和歌を善くす、晩年此處に遁世し、以て自ら遣れり、

つらかりしねざめの音もわすられて明くれはひろふ軒のさゝ栗　長孝

かりそめにかこふ計りのさゝのやも住人からそ名は殘りける　蒿溪

大澤池　嵯峨天皇、離宮の御庭池にして、一名庭湖と稱す、塘上、櫻楓の老樹、枝を交へ、春秋の風光佳絶なり、池中二島あり、大を天神島といひ、小を菊が島といふ、又其東に一奇岩あり、潭底より屹立す、之を庭湖石と稱し、巨勢金岡が築造に係る、

一もとゝおもひし菊を大澤の池の底にも誰かうゑけむ　紀友則

大澤の池のけしきはふりゆけとかはらすすめる秋夜の月　俊成

庭の石にめたづる人もなからまし程あるさまに立しおかねは　西行

木々の色のうつろふ池に浮鴨や去くれもしらぬ青葉なるらむ　後水尾院

大慶殿
慶寺
鐵窟

水廣み空にはたるの飛かけのうつろふ數も大さはの池　宣長

あけぬとて曉はれてとも大澤のあしまの月はかけもさわかす　景樹

大澤や一本の名はしらさくのうつろひ殘る色にそ有ける　千蔭

大澤や雲はくひなの夜をつくる　蒼虬

名古曾瀧址　大澤の北、一町程にあり、離宮の御庭内にて、樓などありし故、瀧殿の址、と云ひ傳へり、今に清泉涌出して、奇石散存せり、

瀧の音はたへて久しくなりぬれと名こそ流れてなほきこえけれ　大納言公任

あせにけり今たにかゝる瀧つせの早くも人は見るへかりける　赤染衛門

あたなれや絶て久しき瀧つせになかめし人も名こそきこゆれ　光廣

閼伽井　弘法大師、加持水にして五社明神の後にあり、

五社明神祠　大澤の西涯の森にあり、離宮の御鎮守にして、伊勢、石清水、加茂、春日、松尾、の五社を祀れり、

津崎村岡碑　近衛家老女村岡が、孱弱の身を以て、王事に盡瘁したる、功績を叙せり、（亜野安繁の撰文）村岡は大覺寺宮の臣、津崎氏の出なり、

嵯峨院大覺寺門跡

嵯峨太上皇の仙洞、弘法大師練行の地にして、嵯峨御所と稱す

弘仁二年三月十一日、天皇利民安土の爲に、一堂を創建し、大師に勅して、五大明王の秘法を修せしめ給ふ、大師乃ち一刀三禮を以て、五大明王の像を刻み、長日の供養をなす、嵯峨五大堂是なり、又其傍に五覺院を建て、大師をして常に之に居らしめ賜ふ、大覺寺の興る、實に此に因す、弘仁九年春、天下大疫す、生黎の道路に斃るゝ者、數を知らず、天皇深く宸襟を惱ませ玉ひ、親ら紺紙金泥を以て、般若心經の妙典を、書寫し給ひ大師に勅して、之を讀誦せしめ給ふ、即時靈驗あり、億兆安を得、天皇叡感の餘り、心經殿を建て大師をして常に奉供せしめ玉へり、

貞觀十八年、淳和院太后の令旨により、離宮を更て、佛寺と爲し、淳和天皇第二皇子、恒寂法親王に賜ひ、名て大覺寺といふ、之を當寺の開祖とす、延喜十八年八月、寛平法皇、當寺に於て伺部灌頂を行はせ玉ふ、觀空僧正、法を受け當寺に主たり、幾くもなくして、定昭大僧都に讓り、仁和寺に歸す、定昭、南都二乘院を興し、以て當寺を兼務し爾後十五代、二百八十餘年間、南都より兼帶せり、永文五年、後嵯峨院、龜山院相次て當寺に御在住、弘安十年、後宇多法皇入御、元亨元年伽藍僧坊を新營し給ひ、輪奐の美結搆の壯を極む、依て御中興大覺寺法皇と稱し奉りぬ、先是、文保二年、後醍醐天皇即位の首め、鎌倉武將の奏請により、後宇多法皇大覺寺御所に於て、萬機を親裁し玉ふ事四年、其御落飾の后たるを以て、常に玉冠を御座の上に掛け玉ふ、故に大覺寺の正寢を今尚御冠の間と稱す、御所號を用ゐ來りしも、亦是等の故なりとぞ、法皇御遺告二十五箇條を殘し玉ふ、明德三年、南北朝御媾和に際し、後龜山天皇三神器を奉して、南山の行宮より當寺に入御、御父子の禮を以て、神器を北朝、後小松天皇に授け玉ひ、茲に両朝の御媾和成る、是等赫々たる事歴は、他の門跡寺家に於て、絶て其比を見ざる處にして、舊寺領上嵯峨一圓の、守護司不入たりし特權も、亦實に此に因す、後宇多天皇の皇子、法圓法親王より以來、光格天皇の御養子、慈性法親王に至る、通して二十一世、代々法親王聯綿相續し玉へり、

氣序如今春欲レ老。嵯峨山院暖光遲。峰雲不レ覺侵二梁棟一。渓水尋常對二簾帷一。

嵯峨太上皇御製

天借倫問道自肥。知君行路客塵稀。林間馬欲驚黃落。月下人應嘯翠微。老鶴從來仙洞駕。寒雲在昔妓樓衣。曾經此地傷懷苦。縱得追尋死不歸。

御愛庭樹春興長。吟餘賜我以紅粧。一枝一詠多恩露。非啻花香一字亦香。（翰林五鳳集）　菅相丞

山里は散紅葉に道絶て冬は人めのかゝる也けり　後宇多院

わすれんとおもふかひなくふることを又いひ出てゝしほる袖哉　後龜山院

年を經てあれこそまされ嵯峨の山君かすみこし跡はあれども　一品寛尊

さか山の松も君にしとはれすはたれにかたらむ千世のふること　景樹

因に云大覺寺傳記の詳なるは、編者別に一冊子と爲したれば、就て見るべし、

後宇多院御陵　長刀坂山、字、蓮華峰寺にあり、八角堂と稱す、

菖蒲谷池　大覺寺の北の山中にあり、寛永年間、吉田了意の孫道宇、光由兄弟の穿造したるものにて、其事歴は、麓に立てたる碑文に在り、

祥鳳山直指庵　迴尾山の麓、字、細谷にあり、正保年中獨照和尚之を開く、偈あり、

幽居選得古宕陰。泉石雲松山更深。身世両俱遺此地。一生應不負初心。

後、黄檗隱元、來朝、長崎より此地に入り、柱杖を留む、法嗣、月潭、相次て此に住す

斯る靈源も、惜哉明治の初年、祝融氏の襲ふ所と爲り、今は僅に開山堂を存し、松風時に訪へども、木像默して答へず、

細谷の木魚の音やよ呼子とり　露明

嵯峨天皇御陵　大覺寺西北、字、御廟山にあり、

稱念寺　御廟山の麓にあり、文明年間、大覺寺義俊淮三后の稱念上人、歸依の餘り、建立せられたるもの也、

觀空寺觀音堂　嵯峨天皇御草創にて、往古大覺寺伽藍の一なりしも、今は荒廢して僅に一小庵あるのみ、

五臺山清涼寺　河源左大臣源融公山莊、棲霞觀の舊地（栖霞觀は今の阿彌陀堂の場所也）にして、貞觀年間佛寺となし、棲霞寺と號し、又別に一堂を建て、釋迦の像を安す、釋迦堂の名、實に此に起る、次て寛和三年二月十一日僧奇然、宋より歸朝し、摺本の一切經論、及、等身の赤栴檀釋迦牟尼の靈像、（奇然入宋の時、汴都の西花門外、啓聖禪院に於て、見首揭磨作の靈像を拜し、佛工、張榮をして、之を模刻せしめたるもの也、）並に十大弟子の畫像を齎し、之を上品蓮臺寺に安す、一條天皇の永延元年八月十八日、奇然奏して、更に愛宕山の靈地を選み、漢土の五臺山に擬し、一大伽藍を創建し、以て此瑞像を安置せ

ん事を請ふ、然るに未だ、勅許を得るに至らずして、長和五年逝す、高弟盛算、先師の遺志を繼ぎ、重ねて此事を奏請し、遂に棲霞寺の内、一堂を以て、清涼寺となすの勅許を得たり、爾來數百年の星霜を經て、種々變遷ありしも、本尊釋迦佛、希世の靈像たるの故を以て、古來貴賤上下の歸依淺からず、今の本堂の如き元祿年間、住持、堯鎭、緇素を勸化して、再建し、圖子は德川桂昌院の寄進せし處なり、當寺は舊來、眞言、淨土兼學の道場にて、塔中總て十餘ケ寺もありしが、明治維新に至り眞言派は古來の緣由を以て、大覺寺門跡に合併し、淨土派は卽、清涼寺に歸し、以て今日に至れり、

逃名將指鷲山月。稽首遙拂鶴樹風。西出都門尋景趣。棲霞觀下片霞紅。（春日於栖霞寺　藤敦基）

妙相自然三十二。豈容天匠斧斤招。試見未點地跟脚。果可枏檀入細彫。（像頃眞像至倫敦　虎關去地寸余）

わかれ行彌生の空にしたはれてしらぬ人にもまとふけふかな　俊賴

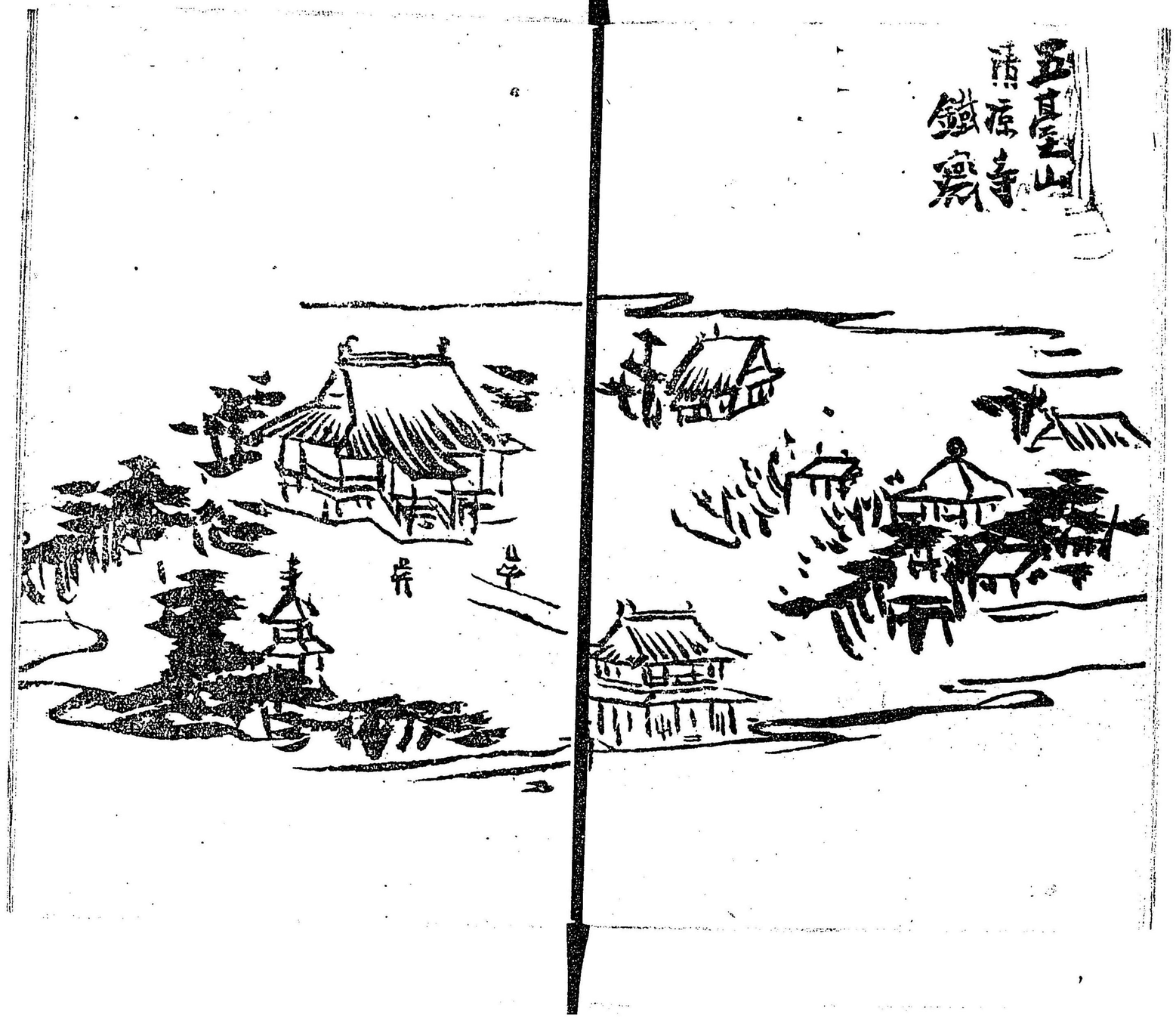
わしの山ふれゝひ影のうつり來て嵯峨野の露に有明の月　寂蓮

月殘るさか野の寺のかねの音に常に浮世のゆめやさめさん　榮雅

さかのてら後の世かけていのりしを君もわすれるな我もわすれし　爲家

時賴

五臺山
清涼寺
鐵窰



此寺に於て、毎年執行する涅槃會三月十五日大念佛四月十日十四日四月十九日共に有名のものにて、遠近より參詣者甚だ多し、

融公墓 清涼寺境内にあり、融公は嵯峨天皇の皇子にして、嵯峨源氏の祖なり、

奇然上人塚 清涼寺方丈の北、半町にあり、奇然姓は藤原、南都の人なり、長和五年寂す、贈して弘濟大師と號す、

藥師寺 龍蟠山、療病院と稱す、本尊藥師如來は、弘仁九年天下大疫の際、嵯峨天皇、弘法大師に勅して、一刀三禮を以て、刻まし給ひし靈佛にして、必經秘鍵の藥師といふ、

十萬上人塚 清涼寺の後の墓地にあり、

嵯峨に於て、古來有名なる、大念佛の由來を示さんが爲めに、緣起に依て、茲に十萬上人の略歴を掲げん、少しく小說に類するの点なきに非るも、觀者共れ能く鑑別せは、可ならんか、

清涼寺塔頭、地藏院大覺寺に屬する眞言宗の一寺なりしも今廢す の開基圓覺上人は、伊賀國服部郷、殖松村、在

麗廣元長者の一子なり、始め、長者齢已に三十を越て子なし、於是南都に上り、春日の祠に參籠すること百日、靈驗あり、其妻忽ち懐胎し、男子を生む、一族大に喜ひ、今若丸と命名す、終ち天火あり、長者の大厦、眷屬の舍宅に至るまで、悉皆烏有に歸す、於是一族流離の不幸に陷り、今若丸は其母之を抱き、南都に出て、涙を呑て之を道途に棄て、已れは四方に漂泊す、人あり、此兒を大佛殿の傍に拾ひ、養育す、今若年十五にして、剃髪し、戒を東大寺に受け、修廣と稱す、業成り、平安城に上り、弘安二年洛西法金剛院に於て、容を變し、狂体を裝ひ、皷鞨を叩き、音頭を取り、衆生を集め、自ら導師となり、念佛す、其間動もすれは「母見たや」といふ、聽衆亦之に和して、「母見たや」と唱ふ、斯くの如く念佛を勸め、其徒十万人に滿れは、供養をなして、復た勸む、故に世に十萬上人といふ、事、天聞に達す、後宇多院深く之を賞し、圓覺上人の號を賜ふ、然るに圓覺、未た母に會はさるを歎き、居を嵯峨の釋迦堂に移し、猶諸人を集めて、母見たやの念佛に耽る、一日人あり、曰く汝か母は播磨國にあるべしと、上人即ち袂を投して、播磨に赴く、天油然として雷雨俄に至る、乃ち一樹の蔭を、求む、盲目の一老嫗あり、獨語して曰く、噫、此迅雷風烈、今若、今安くにあるや、今若雷鳴を忌むこと甚し、三歳にして彼を棄てたり、相會はさること幾年ぞ吁彼れ今何處にあるやと、上人之を聞て、且つ驚き、且つ喜ひ、告くるに今若は即ち我なるを以てす、多年の宿願此に遂け、母子の再會を得たり、於是相携へて嵯峨に歸り、釋迦堂の奥に、一院を創立し、地藏院と號す、次て正安三年六月十一日、上人寂す、

遊女夕霧墓　全所にあり、

八幡宮祠　清凉寺の北、二町の山麓にあり、大覺寺義昭准后、鹿王院周爲和尚、合立の祠なり、

化野念佛寺　一華表の前の山腹にあり、華西山と稱す、往古は洛東、鳥部山と併稱し、洛西の荒野所なりし也、今の念佛寺は、何の代の創建ともわかす、

あたし野のおかやか下は誰か爲めに亂れ初たる暮をまつらん　定家

れとてもとまるへきかは化野の草の葉ことにすがる白露

此山邊に、古來一種の奇花を生す、仙翁花と稱す、今は全く絶たるが如し、惜むべきかな、

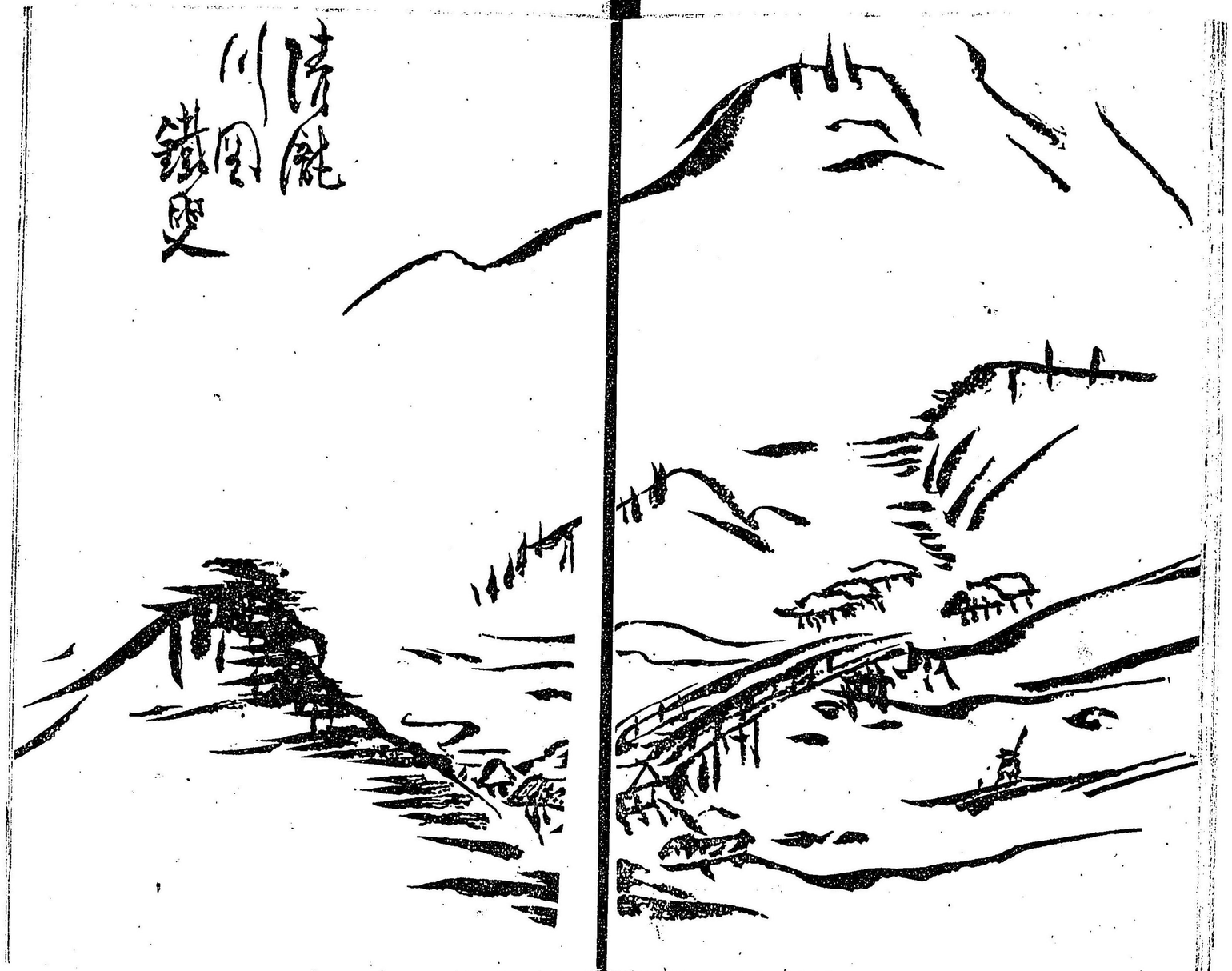
一簇仙翁寺裡霞。炎天最愛吐二奇葩一。大唐四百餘州濶。未レ識秋風有二此花一。五風集

二華表　愛宕登山、第一の鳥居なり、是より山上迄五十町、

清瀧川　一華表より試みの峠（其間十二間）を越え行けば、清瀧川の涯に出づ、小野、杉阪の邊より、栂尾、高雄を經て、來る渓流にして、苔むす岩にむせびては、雲烟も生ずめり、両岸の竹樹蔚蒼として、最も幽邃の好境なり、板橋を架す、渡猿橋と稱す、

音まかふ木葉しくれとこきまぜて岩瀬に染る清瀧の波　定家
清たきの瀬々のしら糸くりためて山分衣をりてきましを　神代法師
きよ瀧の瀬々のしらいとおのづから玉ぬきとめす散る螢かな　知家
石はしる清瀧川に玉ちりてむすびかねたる薄てはりかな　雅經
岩かねに天くだりけるきよ瀧はいつれの神のなかれなるらむ　隆辨
春の夜も名に立音い清たきや霞あやなき浪の月かけ　宣長
筏おろす清たき川のたきつせにちりて流るゝ山ふきの花　景樹
清たきの水くみよせてところてん　はせを
清たきや夢のやうなる蟬のこゑ　蒼虬

月輪寺　鎌倉山と稱す、往古、地中より一寶鏡を掘り出す、鏡背に戴文あり、曰く奇哉觀自在照体普彌綸佛祖大圓鑑人天漏月輪仍て寺號となす、慶俊法師の開基にして、九條攝政兼實公、致仕の後、此山に住み、中興す、故に公を月輪禪閤といふ、本尊千手


清龍
川國
鐵墨

觀音の立像なり、

時雨櫻ハ、寺の前にあり、親鸞上人の手植に係るといふ、新暦五月上旬、花さき、露落ること、しげし、故に此名あり、

山さくらあくまていろを見つるかな花ちるへくも風吹かぬ間に　平兼盛

藤の花さかりとなれは庭の面におもひもかけぬ波を立ぬる　能宣

待わふるこの月の輪の寺ふりて　宗祇

空也瀧。日臺瀧　清瀧、渡猿橋より十町程、奥にあり、空也上人練行の處なりといふ、飛瀑三四丈、洛中第一の大瀑にして、夏猶寒し、

きのふけふ秋くるからにひくらしの聲打そふる瀧のしら浪　法印玄旨

大杉　愛宕坂、三十町目の上にある、古木なり、傳に云、役小角、釋雲遍と二人、此山に登りし時、五佛、此杉の梢に現す、依て其木を祭ると、

愛宕神社　愛宕山、一名、旭峰の頂上にあり、本社、伊弉冊命、稚日産命、埴山姫命、天熊人命、豐受姫命、奥社、雷神、迦遇槌命、破無命を奉祀す、當社は、往古、洛北鷹が峰にありしを、光仁天皇、天應元年六月、釋慶俊に勅して、此山上に移さしめ、和氣

清麿、役を督して、社殿を建つ、而して舊地鷹が峰は、愛宕郡に屬せしを以て、愛宕山大權現と號し、長く皇居の乾を守護し、又火災を除かんが爲に、火産の神靈を、合祀す。先是、大資年中、役小角、僧泰澄と共に、此山に上り、茂荆を拓き、一の道場を造り、旭峰白雲寺と號す、之れ即此山の開祖にして、釋慶俊は實に其中興たり、山上、五坊、眞言天台兼學にして、共に大覺寺に屬せしも、維新後、神佛混淆を禁せられしより、是等の院坊、皆廢して、今は純然たる神社となれり、山中、老杉鬱々、雲霧を蒸生し、寔に神聖の靈地とす、

致寺連雲絶二纖埃一。葉紆嶮棧路遥哉。毘盧八万由旬頂。雨曼陀峰濯雪來。五風集英雨

あさらけき朝日のかけに愛宕山雪も氷もとけそくたくる　定家

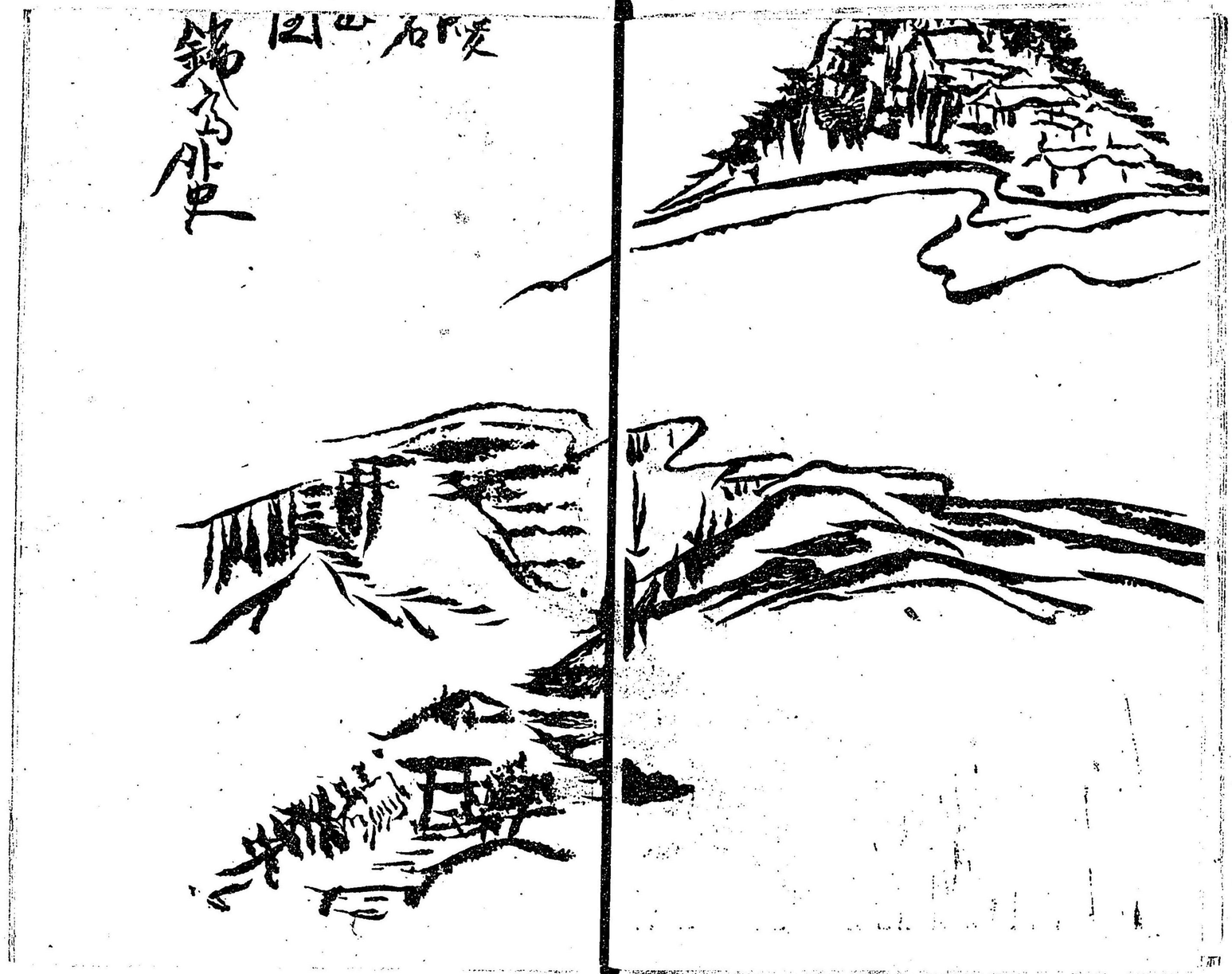
我やとゝそなたを見てもなくさむる誰かあたこの山といひけん　家隆

天正十年五月廿七日、明智光秀、愛宕山威德院に於て、百韻の連歌をなせしといふ、

ときは今天がしたゑる五月かな　行祐

みつ上けさまさる庭のなつ山　紹巴

花みつる池のなかれをせきとめて


錦高堂

樒が原　愛宕神社の後にあり、其名の起原、詳にせず、

愛宕山―きみか原に雪つもり花つむ人の跡たにもなし　好忠

つみかへるしきみか原の夕かせや秋の雪もふき拂ふらむ　玄旨

粟田山圓覺寺　愛宕の西麓、水尾村にあり、本尊聖觀音　清和天皇、禪位の後、此地に遷御あり、崩御の後、遺勅により、此寺の西の山陵に葬り奉り、且、御冥福の爲めに、一寺を建てたるなり、

往生院祇王寺　二尊院の北の山麓にあり、祇王尼を開基とす、本尊阿彌陀佛、外に清盛、祇王、祇女、佛、及母刀自の木像あり、

祇王妓女とちたる柴のあみ戸には佛はかりそおはしましける　貞德

祇王妓女佛もこもる十夜かな　嘯山

祇王は江州野洲郡、江邊の庄、今の祇王村の産、父、名は時定、江邊九郎と稱し、代々庄司たり、承安元年、罪あり伊豆に流さる、祇王妓女、母に從ひて京都に出で、白拍子となり、祇園の邊に住す、後、平相國、清盛の寵を受く、一日、相國祇王の欲する處を問ふ、祇王答て曰く、君寵倦遲、又何をか求めん、唯、妾か鄉里、常に旱害に苦む願くは水利を賜ふを得ん、清盛卽ち吏に命じて、工を起し、野洲川の上流を引くと、

三里、一庄三村、忽ち旱害を免る、于今源泉混々たる、祇王井川卽是なり、既にして佛女なるものあり、自ら薦めて、伎を清盛に獻す、入道一見魂奪はれ、輙ち祇王を棄てゝ、佛女を寵す、祇王卽ち、

もえいつるもかるゝもおなし野への草いつれか秋にあはてはつへき

の一首を題して去り、卽日薙髮して、母及妹祇女と共に、此地に隱る、幾くもなくして、夜、柴門を叩く者あり、怪て之を開きみるに、佛女なり、蓋し佛も遂に棄てらるべきを悟り、自ら走て祇王の高蹋をふみたる也、於是四人圓欒、念佛して餘生を送る祇王時に年十九、祇女十七、母刀自四十五、佛十八なりし、（祇王妓女等嵯峨に隱れたる後清盛人を以て之を追はしむ祇王等卽逃れて讃岐に走り暫し此に隱る全國巻川郡安原郷の東谷といへる山間に今猶其庵跡あり又祇王の墓せる尺餘の石佛阿彌陀如來一体は彷彿たる眞宗の一院に保管せりと云ふ）明治の初年、寺壞して草叢に屬せしも、大覺寺門跡大僧正楠王諦、再興を企て、北垣國道、谷鐵臣翁等の盡力により、今再建の計畫中なり、

因に云、祇王の素性及遺績は、編者自ら其出生地に就き、討査したる處にして、確固たる事實なり、

寺の前に、五輪塔二基あり、一を清盛、一を四人の墓とす。

往生院とは、此邊、寺院の總號なるや、將た別に此名の寺ありしや、未だ詳にせず、

皆人のゆきて生るゝやとりてこそ浮世のさかの西にありけれ　後小松院

瀧口寺址（たきくちのあと）

祇王寺の南隣にあり、舊と、三寶寺と稱す、維新の際廢す、源平盛衰記によれは、小松內府重盛の家來に、瀧口といへるものあり、建禮門院の侍女、橫笛に通したるを、瀧口が父、左衞門尉の怒にふれ、瀧口は世を棄て、阿淨と號し、此所にかくれ住めり、或とき橫笛、其跡を慕ひ、此庵に尋ね來りしも、瀧口、出家の後とて、つれなくも會はず、橫笛いたくうらみて、かへるさに、一首を門前の石にかいつけゝる、此石は歌石と稱し今に在り

山ふかみおもひ入りぬる柴の戸のまことの道に我を導け　橫笛

かへし

しらせ弓そるをうらみと思ふなよ誠の道に入りしわか身は　瀧口

しらせ弓そるをうらみとおもひーよ誠の道に入るそうれしき　橫笛

新田公首塚

近き頃迄小祠あり、土俗、新田十三社といへり、今廢す、傳云、義貞越前に於て、忠死せし時、賊軍首を得て、之を三條河原に暴す、一夜、風雨に乘じて、此首を盜む者あり、其頃、匂當內侍、往生院にかくれ居たれは、窃かに人を遣し、首を盜み歸り、此に葬りしならんかと、近頃前府尹、北垣國道、谷鐵臣の諸氏相謀り、一碑を

此に建て、以て此事を不朽に傳ふ、

定家卿小倉山莊

二尊院の東、中院町にあり、今、厭離庵と稱するもの是なり、定家爲家、爲相卿等、相繼て閑居せられたる處にして、彼の小倉百首の選は、實に此地に成れり、庵の東側に、硯の水、一名柳の水と、稱する清泉あり、今猶、涌きもやまず、

露霜の小倉のやまに家ゐしてはさても袖のくちぬへきかな　定家

住そめしあとなかりせは小倉山いつくに老の身をかくさまし　爲家

めくりあふ秋のは月のはつかにもみぬ世をとへは袖そ露けき　爲相

ふてならて尋ねみしかな小倉山なを敷島の道のあとゝは　光廣

いにしへは、かしこきあたりの御幸もありしと見え、明月記に、被レ臯二入御興於中院草庵一、面目耻辱、云々、御二覽內一、勝地之由、被レ仰、云々とあり、

定家卿の墓は、庵の乾隅にあり、爲家卿の墓は庵の東一町、田圃の中に在り、

二尊院

天台、眞言、律、淨土兼學、本尊、釋迦、彌陀座像、春日作、小倉山の額は、後柏原院宸筆、二尊院の額は、後奈良院の宸筆、

當院は嵯峨天皇勅願に因て、彌陀、釋迦を安置し給ひ、法然上人及湛空上人中興す、月輪關白兼實公、崇敬の後、代々攝籙貴種の由緒、歷々たる院室なり、今の佛殿等は、良

純法師の時に成りしといふ、

此寺に傳はれる、圓光大師足引の御影は、宅磨法眼の筆にして、世に有名なるもの也傳云、月輪殿下、上人を信敬すること久し、一日上人を請しけるに、偶々上人、浴室より出でゝ、休息の体、何となく殊勝に見えたりければ、側に居合はしたる、宅磨法眼に命して、彷に其如在の相を寫さしめしに、丈六に坐せる、一方の足先、半ば出でたり、殿下却て之を喜ひ、秘藏せり、其後、上人之を見て、其居相の不嚴をなげき、像に向て持念せられしかば、足自ら消て、正坐の姿となれりけり、是れ偏に、上人の奇特、畫工の靈腕、然らしむる處なりとか、

圓光大師の廟は、院後に在り、行狀碑は今磨滅して見えず又此山腹には三條、二條、鷹司、等貴種名族の墓、數多あり、其他、伊藤仁齊、東涯、吉田了意等、諸大家の墓、皆此寺の苔むす石となれり、

境內、楓樹殊に多く、秋霜九月、吟杖を曳く、最も可、

斷碣荒涼蘚蝕文。曾摩二病眼一認二前勳一。道尊二北闕一人皆仰。名重二西山一世已聞。滿院花枝春乍晚。一庭月色夜還分。無端引起曾游興。夢躡二嵯峨嶺上雲一。續二空公行狀碑一、空花集

紅葉從來屬二小倉一。緬懷曾擅御遊場。楓雖三秋後期二台覽一。錦上添レ花昨夜霜。五鳳集、策彥

小倉山 往生院の後より、南の方、龜山に至る山嶺を總稱して、小倉山といふ、此山にかゝはる吟詠、古來數ふべからず、今其ふたつ三つを、

露けさは 我身のさかの小倉山 ふもとの野へは 秋ならねども　　俊成

をくら山西こそ秋と尋ぬれは夕日にまかふみねのもみち葉　　家隆

夕月夜小くらの山になく鹿の聲のうちにや秋は來るらむ　　貞之

小くら山峰の紅葉こゝろあらは今一度の御幸またなむ　　貞信

をくらやまみねの木葉にきゝなれて時雨せぬ夜もぬるゝ袖かな　　順德院

ふかかへて花見にくれは小倉山いとゝ霞の立かくすなり　　忠峰

時雨亭 二尊院の山上、一町程にあり、定家卿の時々吟杖をひかれし處にして、眺望佳絶なり、

常寂光寺 本尊三寶四菩薩、寛永年間、本國寺十六世、日禎（廣橋大納言光國卿の子）此に遁れ住みしより、代々日蓮宗相續せり、此地、小倉の山腹にありて、幽閑最も好し、故に定家卿以來、隱棲の人甚多し、

小倉山 ーくるゝ頃の朝なくきのふはうすき四方の紅葉　　定家

をくら山 秋のおはれや殘らまし 小鹿の 妻の つれなからすは　　仝

しのはれんものとはなしに小倉山 軒端の松そなれて入しき　　仝

小くら山松のむかしを友とみて 幾 とせ 老の世をおくるらむ　　爲家

小くら山ふもとをこむる夕きりに立もらさるゝ小男鹿の聲　　西行

てりもせぬおほろ月夜の小くら山されともあかす花かけにして　　景樹

山上の歌仙祠には、定家卿を祀れり、近年有志の再興せし處にして、常寂光寺の庭前より、登るを得べし、

前中書王、赫明親王の墓は、寺の艮隅にあり

小倉里 此山麓一帶の地、今、山本と稱する處の總稱也、閑寂を愛するの人、宜しく此に茅屋を搆ふべし、

小倉山ふもとの里の夕きりに 宿 こそ 見えぬ 衣うつ 也　　順德院

いつとなく小倉の里に心あれやくれぬといそく山の端の月　　後鳥羽院

西行庵・落柿舍 西行法師の庵跡を慕ひて、俳哲去來が落柿舍てふ草廬を、結ひしも

の歟、確知しがたしと雖も、其異名仝所たるは、疑ふべからす、

吾ものと秋の梢をおもふかな小倉の 里 に家ゐせしより　　西行

小鹿なく小倉の山のすそ近く唯ひとりすむ我こゝろかな　　仝

落柿舍の事、風俗文選に詳なり、今其全文を掲けん

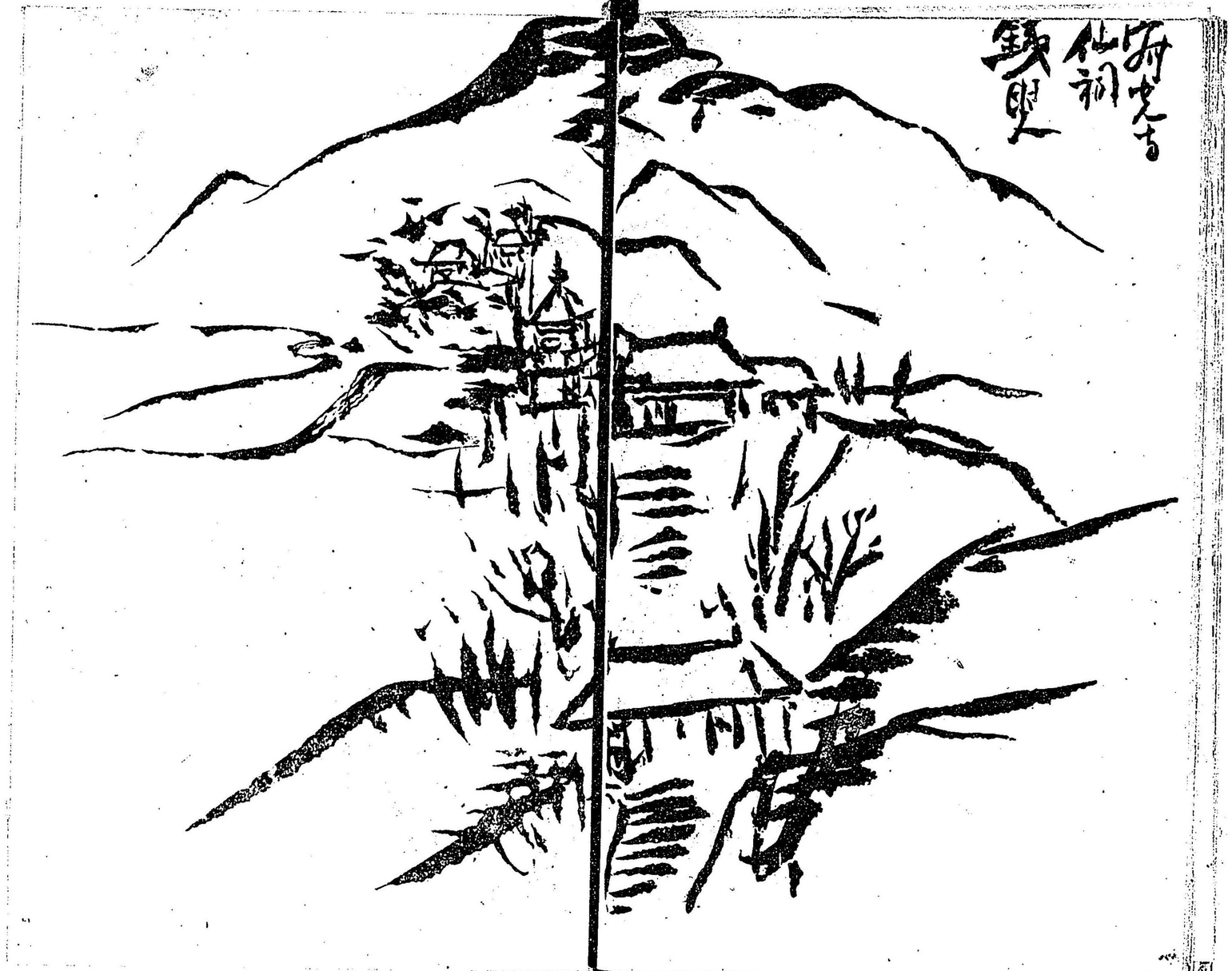
嵯峨にひとつ、ふる家侍る、そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六年經ぬれど。このみも持來らず、代かゆるわざもきかねば。もし雨風に落されなば、王祥が志にもはぢよ。若鳶烏にとられなば、天の帝のめぐみにもゝれなんと、屋敷もる人を常はいどみの、しりけり。ことし八月の末かしこに至りぬ、折ふし都より商人の來り、立木にかい求めむと、一貫文さし出し悦ひかへりぬ、予は猶そこにとゝまりけるにころ〳〵と屋根はしる音、ひし〳〵と庭につぶる、聲。よすがら落ちもやまず。明くれは商人の見舞來り梢つく〳〵と打ながめ、我むかふ髪の頃より、白髪生るまで、此事を業とし侍れど、かくばかり落ぬる柿を見ず、きのふの價、かへしくれたびてむやと佗ふいと便なければ、ゆるしやりぬ、此者のかへりに友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舍の去來と書はじめけり。

柿ぬしや木すゑは近きあらしやま　去來

芭蕉翁を始め、其頃、有數の俳士、前後此に遊ひしもの甚多し、翁の嵯峨日記、頗興あり、

五月雨や色紙へきたる壁のあと　はせを

柚の花やむかしゑのはん料理の間　仝


府史古
仙初
錄與

豆植る畑も木部屋も名處かな　凡兆

去來、姓は向井、名は兼時、長崎の人なり、性、温厚篤實、文武両道に達し、蕉門十哲の巨擘たり、翁に後るゝ事十年、にして沒す、墓は庵後め藪林中にあり、烏帽子形の小石に、唯、去來の二字を刻す、嗚呼此質朴以て其人を知るに足る矣、

涌蓮上人墓　去來翁と、其塋域を同ふす、初め天龍寺内に閑居す、元、冷泉爲村卿の門人にして、吟咏甚多し、獅々巖集、最も著る、

いつかまた我身も西にいりはつる　めくる月日の山本の庵　涌蓮

留守の戸の外や露おく物はかり　太祇

寂蓮法師庵跡　今其所を失すれども、恐くは此邊ならむ、

我庵は都のいぬゐすみわひぬうき世の嵯峨とおもひなせども　寂蓮

裏柳社　落柿舍の西隣にあり、今廢す、檀林皇后の遺髮を納めし處也、

楠正行公首塚　清涼寺の坤に當る、竹藪中にあり、此地は天龍寺塔頭、寶篋院の舊地に

屬す、五輪塔二基あり、上なるを正行公下なるを足利義詮とす、寶篋院は義詮の建立に係る、近年前府知事北垣國道、谷鐵臣の諸氏相謀りて地を開き、一大碑を建設し、題して欽忠碑といふ、今其碑文を全錄して、以て事歷を示すの煩を避く、

山城國葛野郡嵯峨村舊有寶篋院稱足利二世義詮菩提院實有楠正行公之首冢焉五百年來入無識之者明治之初院廢撤其庫獲公神位木牌黑漆金字鮮明署曰楠左金吾勇義正行大居士第二世院主吳溪之文副焉評記首冢之由蓋第一世院主默庵與公相識公死之前日曾在河內與公相見公因訣別有所囑托默庵乃收公首予戰地歸瘞之院後紡修其冥福云其後默庵以狀語義詮義詮愀然改容曰正行於我爲仇敵然其忠勇詢可欽慕也吾死願葬其冢側及義詮死默庵從其遺言於是公與義詮同其塋域以至于今日矣京都府知事北垣國道深感其事命傍近壽寧院護藏公神位及吳溪文又與同感者謀建碑冢側取義詮言題曰欽忠囑余書其事余乃據吳溪之文以爲碑記噫薰蕕不同器而今忠奸同塋是或天之所以示勸戒於世歟而欽忠之言出於仇敵可以見天理人心之亘萬世而不滅矣夫

明治二十四年二月正五位谷鐵臣撰文并書

歌詰橋　清涼寺、山門前の通り、二町南の小川に架する土橋也、傳云、昔、此橋畔に酒

屋あり、西行法師休ふに、内より女の出てければ入、西行、和歌を詠す、

つぼの内匂ひ來にけり梅の花まうさけ「酒」ひとつ春のしるしに　西行

女、走り入りて、主に告ぐ、其妻立出でゝ返歌す、

つぼの内にはひし花はうつろひて霞と殘る春のゑるしに

又或說に、西行法師此所にて、小女の綿をもて、通りしを見て、其綿うるかと、尋ねしに、小女答へず、一首を詠す、

山川の瀨にすむ魚のはらにこそうるかといへる綿は有けれ

西行其奇才に感ぜ、返歌せずして立去れり、故に歌詰橋といふと、何れか是なるや辨らず、

後龜山院仙居址　常寂光寺の邊なるべけれど、さだかに分らず、明德三年、南山の皇居を出御、大覺寺御所に於て、神器を北朝、後小松天皇に授け玉ひ、御落飾ありて、暫し大覺寺に、住ゝせ給ひし後、此地に仙居あらせられしなり、

おもひやる人たにあれな住わびぬ嵯峨野の秋の露はいかにと

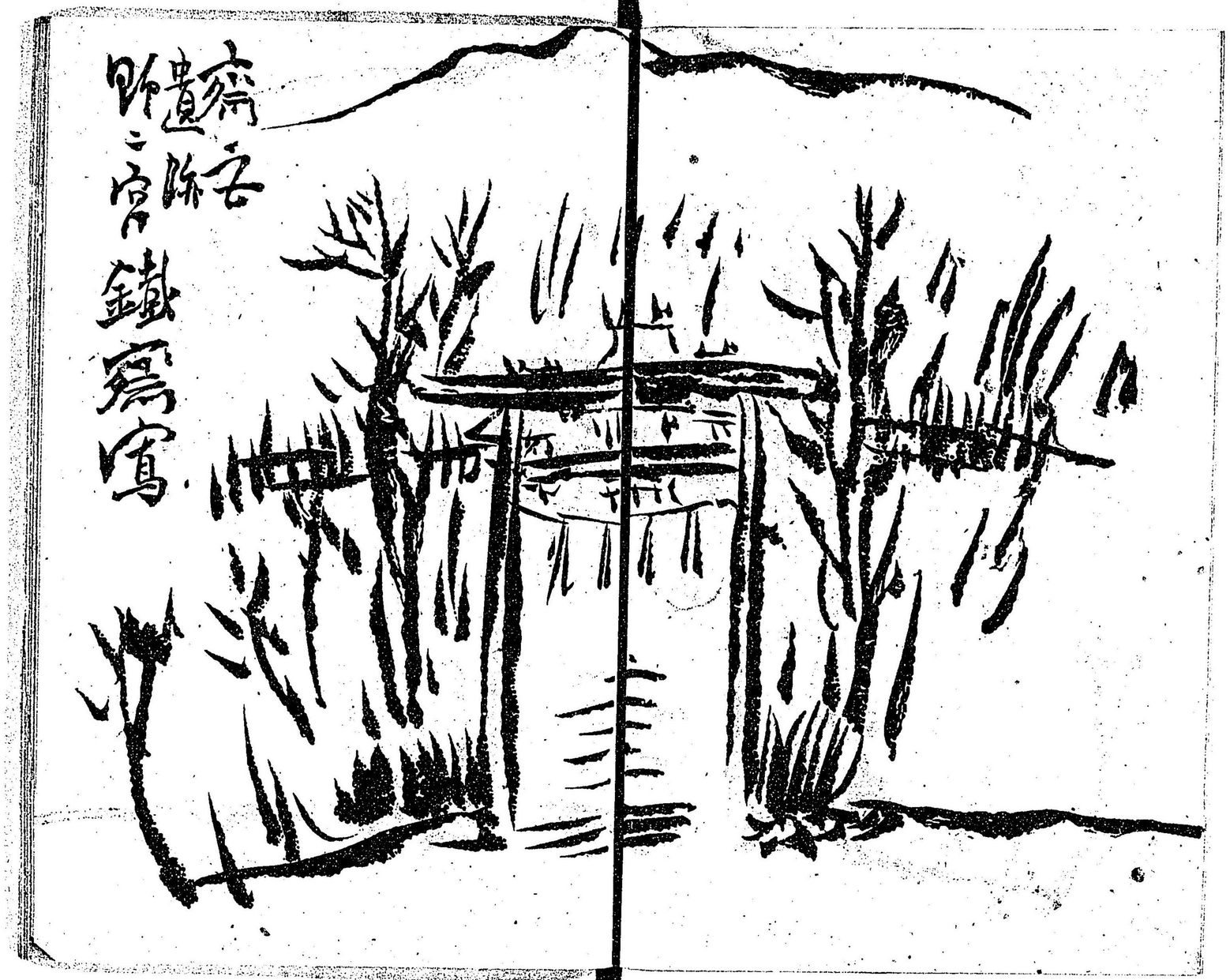
此御述懷を拜するの志士、感果して奈何、

前中書王古蹟　天龍寺の後、龜山の麓なれども、今全く其跡を絶つ、延喜帝第二の皇子、兼明親王、博學宏才、詩文を善くす、初め、源氏の姓を賜ひ、左大臣に任ず、關白兼道、親王の政務に與り玉ふを忌み、窃に之を疎外せん事を謀る、兼明之を怒り、即、兎裘賦を作り、龜山の麓に隱る、此地舊と水なかりしに、兼明、山神に祈りて、水を請ひければ、清泉忽ち涌出して、旱天にも涸るゝ事なし、實に天延三年八月十三日の事也、今に此泉を中書水といふ、（下流、天龍寺の曹源池に落つ、）

當年我讀二呪泉文一。故爲二王孫一勅二舊勳一。一勺清冷猶可レ歃。千年盛事豈無レ聞。出レ從龜背一源々活。流到二龍門一派々分。旱晩天瓢傾滴去。油然潤二色泰山雲一。（空華集）

野々宮　天龍寺の北、一町程の竹藪中に在り、伊勢皇大神宮を奉祀す、所謂、黑木の鳥居、小柴垣、簡古敬すべし、齊宮の事、頗る古く、垂仁天皇の二十六年に、皇女倭姫命を立てゝ齊宮となす、後代々の皇女立給へども、土御門院承元二年四十二代齊宮に至て、後鳥羽院皇女、隆子內親王の後、斷絶す、今其式を尋ぬるに、延喜式に云

窯之遺跡
昨日宮鐵寫寫



凡齊内親王定、畢。即下宮城内便所、爲初齊院。祓潔而乃入。至明年七月、齊於此院、更下城外淨野遷野宮、畢、八月上旬下定吉日。臨河祓潔、即入野宮。九月上旬下吉日一向伊勢大神宮。齊主臨川禊之如前。云々

太上天皇

齊宮女御

琴の音に峰の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけむ

木枯の風のたよりは近けれと人はわすれぬものにそありける

仝

たのもしな野々宮人のうゝる菊しくるゝ秋におへすなりとも

源順

柳さす柴のかきほのかすゝきなを影そふる雪のしらゆふ

入道大政大臣

今もなを神代おもはゆる小柴垣月もむかしをしのひてやとふ

野の宮のかしの下道けふくれは古葉と、もはらる櫻かな

仝

野々宮のとりゐに鶯もなかなけり

景樹

嵯峨中のゝ寂しさくゝ、る薄可南

そせを

嵐雪

亀尾山　暑して亀山といふ、北は小倉山に接し、南大堰川に堺す、山甚だ高からずして、亀の尾に似たり、老松蔚々、頗る好境に屬す、

憶亀山　亀山久往還。南溪夜雨花開後。西嶺秋風葉落間。豈不憶亀山。前中書王

亀のをの山の岩ねをとめて落る瀧のしら玉千代の數かも

祀これたか

行かへり程さへとはき子日哉千代の松ひく龜の尾の山　壬生忠見

つきもせすよはひ久しき龜山の櫻は風もちらさゝりけり　伊勢大輔

大井川久しきことは影うつす龜の尾山の松やしるらむ　大納言經信

龜山のおのかよはひのあるか上にいたゝく松は誰いはふらむ　契沖

かめのをの山の岩ねの初わらひ千代を數ふる手に似たる哉　涌蓮

龜やまはあらしのさゝら幾そたひさきてちる世の春をみつらん　景樹

龜山と、小倉山との、堺を登れは裏山と稱して、風景佳絶の處あり、

龜山の峰うち越て見渡せは清瀧川をくたす筏士　後嵯峨院

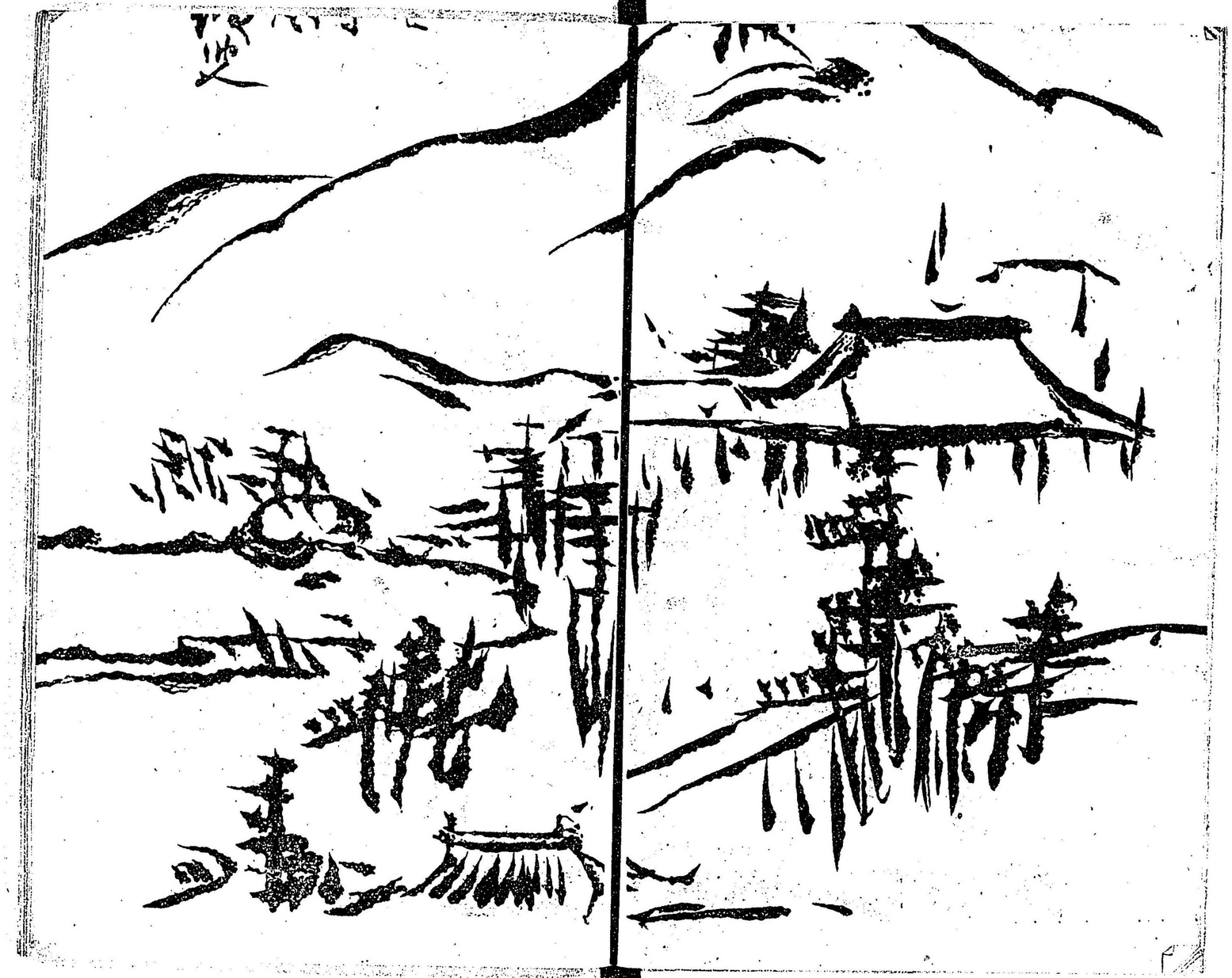
龜山殿遺址　今の天龍寺の地、是なり、後嵯峨院離宮を尋ねて、龜山上皇も住ませ給ふ、當時莊宏なる仙居たりしなり、上皇、嘉元三年九月十五日、此に崩御、十七日此山上に於て、荼毘し奉る、

春ことにおもひやられし三吉野の花はけふこそ宿にさきけれ　太上天皇

我宿のものにあらぬかあらし山あるにさかせて落る瀧つせ　仝

幾里か嵐につけてきゝつらん我か住寺の入相のかね　後嵯峨院

かめのをの千代のたかしの動きなく山の岩ねに宮作りせり　爲家



傑閣隆樓金碧明。六龍聳戴一蓬瀛。皇宮應是帝居側。放出河流一徹底清。 滄北集

天龍資聖禪寺、嵐龜山と號し、臨濟宗五山の第一なり、後醍醐天皇御追福の爲めに、足利尊氏勅許を得て、龜山仙居の址に於て、大道場を建て、夢窓國師を以て開山となす、曆應年間の創立に係る、の故を以て、初は曆應寺と稱せしも、一夜、將軍、金龍大堰川に出づと、夢みて天龍寺と改む、康永五年、七堂伽藍大成し、輪奐の美、洛西に冠たり、於是、足利氏廣大の領地を寄付し、塔頭亦數十の多きに及ひ、一時寺門盛大なり、然るに其後、延文、貞治、應仁、近くは元治甲子の兵燹に罹り、伽藍僧坊、殆んと殄滅し、塔頭の現存せるもの臨川、鹿王、金剛、蔣寧、慈濟、松岩、妙智、弘源、永明、三秀院等なり、

此地、嵐峽の勝景を領し、龜山の幽閑を占む、又院の前後には、南北両朝の陵墓（龜山、後醍醐、光厳、後小松の諸帝陵）苔むして、人をして、轉た懷古の情に、堪えざらしむ、

庭潭を曹源池と稱し、清徹、雲烟を生ず、茂林鬱蒼、鳥語喃々、實に洛西有數の仙境たり、

國師、姓は源氏、勢州の人、宇多天皇九世の孫なり、嘗て死屍九變の相を畫き、慨然として求道の意あり、十八にして僧となる、夢に達摩の像を得、偏に禪門に入り、數々魔壘を摧破す、勅して南禪天龍の二寺を領す、常に宮中に召され、王妃多く弟子となる、後、正覺の號を賜ひ、專ら天龍寺に主たり、觀應二年九月三十日示寂す、

曹源不レ涸直臻レ今。一滴流通廣且深。曲岸回塘休二著眼一。夜闌有二月落波心一　夢窓國師

餘杭門外日將レ晡。多景樓臚一景無。憶得雨奇晴瓶句。暗中摸索識二西湖一。　策彦。

風をまつ花の光も春の夜のみしかき夢の窓の燈しひ　長孝

松杉をゆふへの嵐ふき立てゝ底に沈る入相のかね　滝蓮

名月（めいげつ）に　あめを降（ふ）らす　天龍寺　貞德

薄馬場（すなばば）

天龍寺門前をいふ、古へ、橘氏薄殿、此地にありしを以て、名くといへり、

芹川

天龍寺より二町程東を、南北に流るゝ小川にて、今、瀬戸川と稱するもの是なり、此あたりに、古へ、芹川御殿のありしといふ、

芹川の波もむかしに立かへり御幸たえせぬ嵯峨の山風　後京極

今もなを深き流れのたえすして むかしをかへす芹川の水　公雄

琴聞橋（ことぎきはし）

渡月橋の長隅にある小橋あり、

平家物語にいふ、彈正大弼、仲國おもふやう、誠に法輪寺は、程近き處なれば、月の光にさそはれて、參り給へる事もやと、そなたへ向て、あくかれける、龜山のあたり近く、松のある方に、かすかに琴を、聞えける、峰のあらしか、松風か、尋ぬる人の、琴の音か、覺束なくは、おもへども、駒をはやめて、行程に、片おり戸さしたる内に、琴をぞひきすまされたる、云々

渡月橋

大堰川に架したる、長橋にして、昔は今の處より、半町計り、上流に架したるなり、傳云、龜山院の御時、清朗の夜、月の渡るに似たりとて、名づけ給ひしと、

涵二八万三千戸於波心一。有レ水皆月。架二七十二丈橋於磵底一。未レ露何虹。　宣竹集

虹勢蜿流横二両岸一。一條活路透二清波一。度驢度馬未爲足。玉兎三更推殺過。　夢窓國師

大橋明神

渡月橋の北の詰にあり、大堰神社とも稱す、三代實錄に云、貞觀十八年七月廿一日授二山代大堰神從五位下一云々

臨川寺　琴聞橋の一町、東にあり、龜山殿の別宮にして、皇女、昭慶門院に賜ひ、河端殿と稱せし處なり、元弘三年八月、後醍醐帝第二の皇子、世良親王其跡をつぎ給ふ、親王深く禪宗に歸し、元翁和尚を師とし、此地を以て一禪院と爲さんと欲し、果さずして薨し給ふ、而して師の和尚も、亦繼て西歸す、帝卽ち夢窓國師をして、開山たらしめ給ひ、號して臨川寺といふ、又世良親王、開山國師の外に、本尊彌陀佛を合して、三會院と稱す、現今は天龍寺塔頭の、輪番所となれり、

常ならぬうき世の蜉蝣の野への露消にし跡を尋ねてそかもふ　欣子內親王

門前は所謂、臨川寺馬場にして、河畔の老松、枝を交へ、最も風致に富めり、

臨川寺外法輪路。渡月橋横大堰河。高頃浪花閑下筏。行人和得棹郎歌。梅花無盡藏

大堰川　丹波より來る保津川と、愛宕山下より來る清瀧川と、出合といへる處にて合し、嵐山の麓に流れいつる、清流に出て、吉田了意少來、舟筏の便を開きしものなり、四時の風景、筆舌の得て盡す處に非ず、古來の吟詠、擧て數ふべからずと雖も、先づ夫の著名なる、昌泰元年九月、行幸の時の御事を、菅丞相の筆されし、貫之の假名序をは

小しめ外數首の若歌を掲げん、

あつら、我君の御代長月のこゝぬか、きのふといひて殘れる菊、御覽給へん、またくれぬへき、秋をおしみ給はんとて、月の桂のこなた、春の梅津より、御舟をよそひて三渡守をめして、夕月夜、小倉の山のほとり、行水の大井の川遂に御幸し給へは、久方の空に、塵なひける雲もなく、みゆきをさふらひなから、泉は底にゝごれる、おりなくにて、おはん心にそ、かなへる、みことのりして、仰給ふ、言葉は秋の水にうかめて、流れくるかと、あやまたれ、秋の山をみれは、折ひまなき、にしきをかもはへ紅葉のはのあらしに散て、もらぬ雨ときこえ、菊の花の、岸に殘れるを、曇なる星かとおもひ、白き霜の鶴、川邊に立て、雲のかゝるかとうたがはれ、夕の猿、山のかひに啼て、人の泪をみとむ、旅の雁雲路にまとひて、玉章かとみえ、あそふかもめ、水にすみて、人になれたる、入江の松に、幾世へぬらむと、云ふ事をよませ給ふ、われらみしかき心の、このもかのもに、まとひ、つたなき、ことの葉、吹風の、空に見みたれつゝ、草の葉の露とゝもに、泪落ち、岩波とゝもに、よろこはしき、心そ立かへる、ことの葉、世のすゑまて、殘り、今をむかーに、くらへて、後のけふを、きかん人、あまのたくなは、くりかへし、しのふの草の、しのはさらめや、

そひしらにはしらなゝきてあし引の山のかひあるけふにやはあらぬ

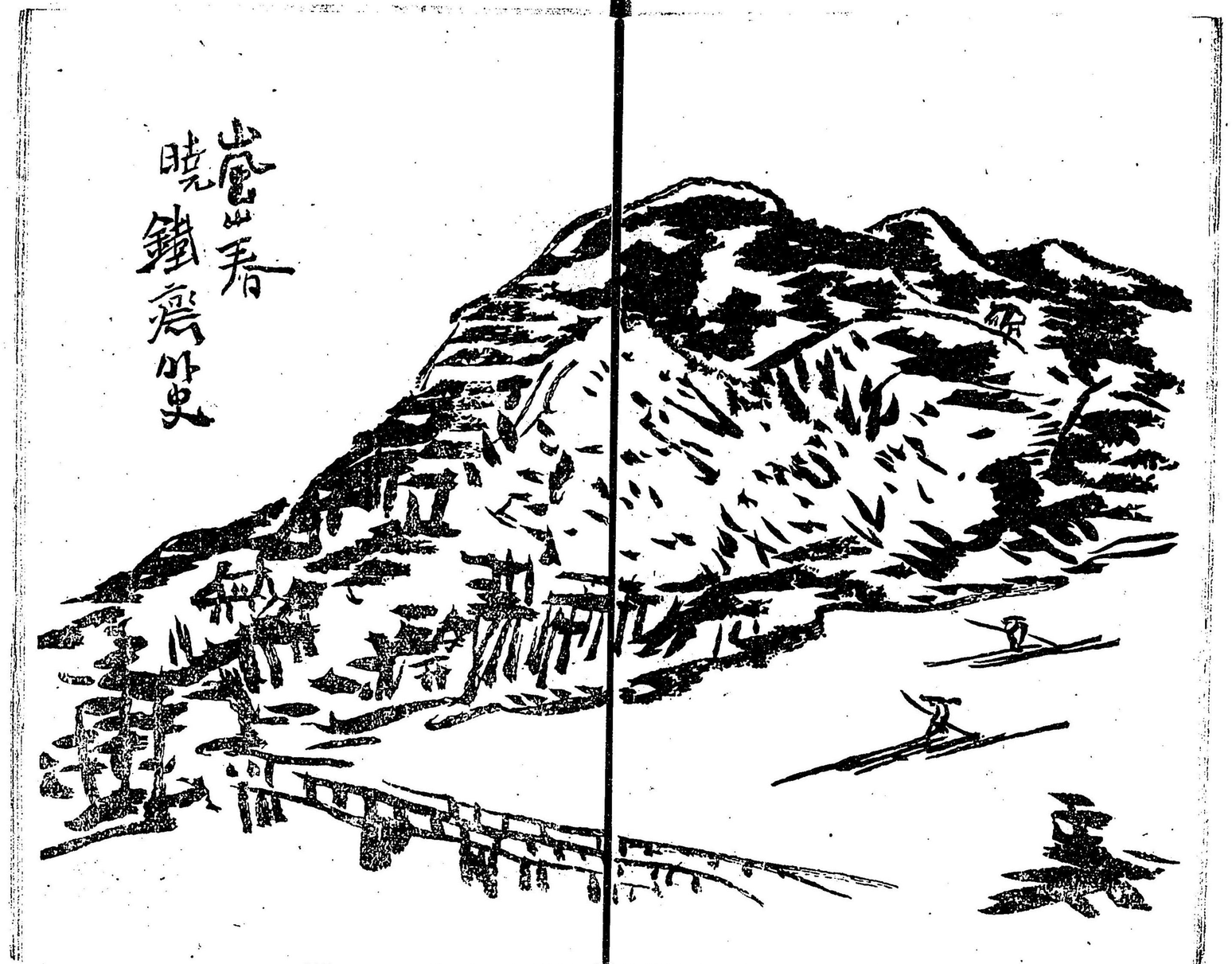
長河形勝在二何處一。見取茫々大井水。問二坐沙邊一和染レ筆。群二來渡口一漫呼レ舟。無題詩　三宮

くれて行春の名殘は大堰川せきもとゝめよ水のしからみ　公雄
大堰川ふるき流れを尋ね來てあらしの山の紅葉をそみる　白河院
我宿のものなりなから大井川せきもとゝめす行木葉かな　後嵯峨院
大井川うかへる舟のかゝり火に小倉の山も名のみなりけり　業平
いろ〳〵の木葉流るゝ大ゐ川下ハかつらの紅葉とやみん　忠峰
大井川かハ邊の松にことゝはんかゝる御幸もありしむかしも　貫之
大井川入江の芦の霜かれに殘るも寒き松の色かな　家隆
大ゐ川御幸ふりにし色なから入江の松に夏は來にけり　順德院
おはゐ川岸のとまやの竹はしらうかりしふしやかきりなりけん　爲家
おはゐ川若葉すゝしき山かけのみとりをわくる水のしからみ　眞淵
大井川月と花とのおはろ夜にひとり霞まぬ涙の音かな　芦庵
大堰川早せをくだす筏士ものとかにみゆる花の頃かな　景樹
行春はいかたの下にかくれけり　蒼虬

三軒家　雪、月、花の三樓あり、古來の遊亭にして、嵐峽の景光を、檻前に集む、

一船誰領詩歌管。三店皆宜雪月花。　恒久

小督墳　三軒家の東、半町、竹藪中にあり、法輪寺の後にあるものと、いづれか信ずるや、不レ詳、


壺山春曉
鐵齋外史

小督局は、禮町中納言の娘にて、高倉院の寵眷を蒙りたるに、故ありて、嵐山の奥にかくれたるを、源仲國尋ね來りたる事跡は、古來最も人口に、膾炙する處なり、

強攪怨情出深宮一輪秋月野村風昔季僮得求琴韵何處孤墳竹樹中。一葉集

うきふしや竹の子となる人の果　せを

嵐山　龜山院、仙居の御時、吉野山より櫻樹、數百株を移植せられ、其後數百年來、天龍寺より保護せしものなり、四時の風光、美絶妙絶、實に天下の衆美、此山川に歸すと稱するも、敢て過言に非るなり、

さしもこそいとふうき名のあらし山花の處といかて成りけん　前關白

春秋のにしきなれとや嵐やまおなしさくらの又もすみらん　後宇多院

尋ね來てこゝには夏もあらし山木かけにこそは秋は有けれ　後京極

秋涼しそめぬ梢はあらし山時雨にもるゝ青き一枝　後鳥羽院

雪ふりて花かと見ゆる嵐山松とさくらはさすかゝいれる　夢窓國師

朝まだき嵐の山のさむけれは紅葉のにしきゝぬ人そなき　公任

夕つく日さすや嵐の山おろし物わひしらに猿さけふなり　仲實

嵐山春みし花のあとゝめて秋はさくらの紅葉しにけり　涌蓮

あすまてはさてもあらしの山さくらはつかに殘る花のしら雲　芋庵

都人心を空になしてけり嵐のやまの櫻さくころ　李鷹

嵐山かつるも花のしつくにて雨さへをしき心ちこそすれ　景樹

城西三里是嵐山。三十年來百往還。人已數莖新白髮。花猶一笑舊紅顏。瑞溪

六月や峰に雲おくあらし山　はせを

涼しさや吾抱籠は嵐やま　甍水

段々や小盤大原嵯峨の花　野水

い、さのほれ嵯峨の鮎くひに都とり　貞室

花に來て早や欲ほるや居り酒　梅室

嵐山花はみたれぬ日なりけり　蘭更

ひし〳〵と心に花のひゝきかな　蒼虬

櫟谷社　渡月橋を渡りて、嵐峽の麓に入る處に在り、二座の神は、松尾の勸請、七社の内なり、續日本後記に云。嘉祥元年十一月、奉授山城无位櫟谷神從五位下。

おはね川しくるゝ秋の櫟谷山や嵐の色とかすらむ　爲家

蛇谷　左芦五郎、法輪寺に參籠して、遂に龍の姿を、此谷に見たりと云ひ傳へ

藏王權現祠　蛇谷に沿ふて、參つる事三町、密樹の間、一小祠あり、藏王權現を祀れり、

戸無瀬瀧　嵐山の中央の谷より、落る清泉あり、

浮紅葉玉ちる瀬々のいろそめてとなせの瀧に秋もとまらす　定家

雲のゝる山の高根の夕きりにとなせの瀧の音まさりけり　俊成

嵐山松はみゆきにうつもれて戸無瀬の瀧に聲そ殘れる　爲家

くれ殘るとなせの瀧の岩かねに夏さく花はほたるもけり　千蔭

因に云、大堰川の一名、戸無瀬川と稱せりにや、古人の永言に存す、

流れ行紅葉や秋のとなせ川いてこす浪に嵐ふくらし　順德院

戸無瀬川玉ちる瀬々の月をみて心そ秋にうつりはてぬる　定家

大悲閣千光寺　嵐山の山腹にて、所謂、花の山二町登れは大悲閣とす（本尊、千手觀音立像、惠心僧都作、脇壇には、角倉了意、法華にて、石側弁を持ち、岩上に跪するの像あり、）

角倉了意の提菩所なり、了意、本姓、吉田、近江佐々木氏の庶流、幼にして奇才あり、

始終身を水利に任じ、天龍、富士の両大河を始め、此大堰川の如き、皆、翁の疏鑿に係

る、其國家に、實利を興へ、民業を興せし偉績は、是等の流水と共に、萬世絶ゆざるべし、林道春、爲めに其功業を石に勒して以て寺側に立つ、

河道主事嵯峨吉田了以翁碑銘　法印羅山子滕道春撰　法眼大膳亮源長因書并篆蓋

古云舟楫之利以濟不通嘗聞其語矣今有其人也了以曳其人歟了以姓源氏其先佐佐木支族號吉田者字多帝後也云爾世住江州五代祖德春來城州嵯峨因家焉其所居乃角藏地也洛四隅各有官倉在西曰角倉語在沙門石夢窓天龍寺圖記中德春子宗林宗林子宗忠皆潤屋也而仕室町將家宗忠子宗桂薙髮遊天龍蘭苦嘗學醫術一旦從僧良策彦遊溟渤赴大明明人或稱宗桂號意庵盍取諸醫者意也之義還本邦其業益遥娶中村氏以天文二十三年甲寅某月某日生了以諱光好小字與七後改名了以性嗜工役嘗雖志筮仕而未肯事信長秀吉矣及子前大相國源君之治世也而初出奉拜謁焉慶長九年甲辰了以往作州和針河見艌船以爲凡百川皆可以通舟乃歸嵯峨泝大井川至丹波保津見其路自謂雖多湍石而可行舟翌年乙巳選其子玄之于東武以請之台命謂自古所未通舟今欲通開是二州幸也宜早爲之丙午春三月了以初浚大井川其所大石以轆轤索牽之石在水中則撑浮樓以鐵棒鋭頭長三尺周三尺柄長二丈許繫欄使數十餘人挽扛而徑投下之石悉碎散石出水面則烈火燒碎焉廣而淺者帖石而挾其河深其水又所瀑者鑿其上與下流準乎之逃秋八月役功成先是編筏綫流而已於是自丹波世木邑到嵯峨舟初通五穀擔鐵材石等多載漕民得其利因造宅河邊居焉玄之嗣焉子嚴昭受傳之玄之能審且問儒風於惺窩滕先生有年矣一旦招先生遡遊于河上奇石激湍甚多請先生多改舊號其白泝揚如敝花者號浪花隈舊名大瀨其齊汨環石者號觀瀾盤陀有石相距可二十尺猿抱子飛超其間者號叫猿峽舊名猿飛東有山岩高峻有棲鶻之危巢者號鷹巢石壁斗絶貝如萬卷堆者號群書岩唐名出合此處有石似門廣五丈高百餘尺者號石門關有湍急流船行如飛號鳥船灘舊名灘鶏川灘隣於水尾世傳淸和帝嘗求覩魚干此焉岸有山岩高可五十丈其下水平衡如水載山取山下出泉蒙之義號曰蒙山皆有倭歌在其家集惺窩所遊觀止此焉復有右方三丈許其面如鏡聳於水崖號鏡石又有浮田神祠世傳遂古之世丹波國皆湖也其水赤故曰丹波大山咋神穿浮田決其湖於是丹波水枯爲土乃建祠而祭之以鋤爲神之主此神卽是松尾大神也下此則愛宕龜山在左嵐山在右其勝區可不枚數十二年春了以奉鈞命通船於富士川自駿州岩淵挽舟到甲府山峽洞民未嘗見有舟皆驚曰非魚而走水惟哉惟哉與胡人不知舟何以異哉此川最險甚於嵯峨然漕船通行州民大悅十三年又命了以試自信洲諏訪到遠州掛塚可通舟天龍河否了以雖卽漕遡然無所用故至今舟少方是之時營大佛殿于洛東大木巨材甚勞挽牽了以請循河而運之乃聽之於是自伏見里浮之河泝而拏焉了以見伏見地臭於大佛殿基可六丈卽壞其高爲提於臭處若河曲處置轆轤引起復浮水水平如地先是呼許呼邪者五丁憂之萬牛難之於是水運不勞力不日材木悉達人皆奇之十六年了以請行舟鴨河乃聽之因自伏見河漕艌遡上流遠于二條至今有數百艘遂搆家河傍陡玄之居之玄之男玄記嗣焉十九年富士河壅嶮舟不能行鈞命召了以有病玄之代行治水又能通舟三月始役七月成之開了以病急告假玄之未入洛先二日了以歿實慶長十九年秋七月十二日也時六十一歲此年夏營大悲閣于嵐山山高二十丈許壁立谷

深右有瀑布前有龜山而直視洛中河水流於龜嵐之際舟艇之來去居然可見矣其疾病時謂日須作我肖像置閣側捲巨綱爲座犂爲杖而建石誌玄之等從其遺敘玄之踪其事以寄余請爲之記件件如右昔白圭之治水以隣國爲壑張湯之漕褒斜嶮巇不能通今了以疏大井河偏鴨水決富士川凡其所排通鑿開則舟能行不具其載人皆利之與白圭張湯所爲大異矣所謂舟楫之利以濟不通者不在茲乎宜哉垂裕後昆余與玄之執交入矣故應其請書焉且旌之以銘其詞曰

排巨川兮舟楫通　浮鴨水兮梁如虹　剗復鑿富士河兮有成功　慕其錫玄　圭兮笑彼化黄熊　嵐山之上兮名不朽而無窮

寛永七年庚午秋七月十三日　嗣子源玄之立之

此寺四時の眺望、甚佳なり、

西嶽峻嶒儲二地禎一溪川轉漕自二丹城一群漁携レ網臨レ淵立百丈擎レ舟傍レ岸行氣象岩中秋水漲蒙龜山上暮雲横翠微盤二礴大悲閣一感レ舊鴉鏡三四聲石川丈山集

此處知何處初遊忘二復還一碧潭蟠二大井一綠樹對二龜山一叡岳畫屏列平安眉睫間登レ高心更別因念一訂頑　活所遺稿

嵐山城址　嵐山の絶頂にあり、西京六郎元近の城址なり、元近は管領細川右京大夫政元の臣にして、永正四年六月、叛を謀り、此城に籠る、八月、追討の勢と、河をへだてて戰ひ、矢に中て歿す

花の湯　維新后の築造に係る、嵐峽より涌出する、鐵泉を温めて、入浴に供す、

大堰川上流の諸名勝　大堰川の上流、保津川及菁瀧川筋に、散在せる、奇石怪巖、奔流激湍の間に起伏して、千變万化なるは、實に天下の奇觀たるのみならず、此間を巧にあやつりて、舟筏を流下するは、亦實に神出鬼沒の妙術と謂ふべし、而して此千体万狀の奇景妙觀、先人已に種々の名稱を附せり、茲に之を列擧して以て探勝家に便せんか

○扇岩

○かるきが淵

○千鳥が淵　淵の名に人も去はなく千とり哉

○大神樂石

○浮石

○山の神

○氣象岩　心あてにいはほい高く見えなゝんむかしの人をおもかけにして　惺窩

○猫石

○赤岩　雲となり波とくだくる櫻かな　默化

○大瀬　君ませる御みねのうちに歟やとてちるか大瀬の波の白玉　康則

○棚池

○簗床

○掛場

○龍門の瀧　ことに出てえやは岩間のさゝら波立て見ねてみ洗ふ心を　惺窩

○三本松

○奥の段

○かまつゝ

○蓮花岩　此川の清き水中に咲出しいはほの蓮ちるやちらすや　康則

○鷹ゲ巣

○猿飛　遠近の岩とひ越て綱手引　棹さす水主もましら成らん　直兄

○書物岩　かくしおく誰世の書のあとならん姿を山のたゝむいはほに　惺窩

まれにちる花や書岩の不審紙　淡水

○出合　此處にて、清瀧川と合す

○出合橋　此間の風光、赤壁と雖も、恐くは及ばざらん、

たにゝ川　清たき川の出合に鮎もひれたる書の岩淵　康則

○黒瀬　そゝ立てる岩のとかけの黒瀬には雲も螢のもゝ渡るらん　内直

○ぬめり岩　一名なめら　岩間さす棹のひまなきわさみつゝ

筆とる吾となめら也ける　直兄

○板瀬　なれ〳〵かこも棹さしまとふなり板瀬は水の關にそ有ける　内直

○椎子

○まるかち

○三棹　小舟さす流れは矢より早くして三棹は弓と成りにけるかな　内直

○牛岩

○はしあけ　宗尊親王

○綾戸

○壁岩

○鵜河　大井川鵜舟はそれと見わかて山本めくるかゝり火のかけ　直兄

○鍋瀬　筏士や鵜かひの輩やかしきけんなへ瀬の水はちらけ米なり　直兄

○屏風岩ひきたてゝ屏風の岩のいはねには誰かえかきけんつゝし卯の花　直兄

○舟戸　いかにしてこき過きにけん早かはの舟戸さしぬと見ゆる岩間を　直兄

○赤水

○ゐを免　名計りもしのれにけりその上の大御舟にもなれしかもめは　直兄

○庶すみ　大る川くたす筏の床すみの淵のそこひやいゝ千ひろなる　直兄

○朝日　たゝならぬ山ふところにありけれは朝日はかりや影のさし入　直兄

○孫六大岩　たゝつ岩むつましく見ゆにけれなへてつゝしの花をか　内遠

○ぶくか瀬

○清水

○蔦か瀬

○梅の本

○曲マ淵　龍かみや蟠りぬるまかりふちうつまくみれはそこつ寒けし　直兄

○長瀬　一名二股瀬

○寄ゐゝ

○芦原　さいが瀬ともいふ

○小網打

○大網打

○半兵衛ゐ淵

○引掛　一名氷が瀬　とこしへにとくるとなき山川の氷は岩の結ふ也けり　直兄

○象が鼻

○獅子が口　落たきつこしの岩瀬の白なみにいかにやむせふ山したの口　内　直

○高石

○越の石

○れめき石　石洞あり

○小高瀬　ますらをかすゑ一小たかせ手なれても松引かねつ保津の里人　内　直

○とたひ

○おま石

○大高瀬

○大岩　岩かねの小たかせ過きて見渡せはいとゝ高せに波そみたるゝ　直　兄

○三ッ石

○葉たゝゑの廻り

○大坪

○的石　たれ人かすゑし河逆の的いしは水のいる矢も碎てそちる　直　兄

○平石

○豆腐屋石

○茶屋石

○小鮎ゐ瀬　一名こやか瀬

○ゐぬきの廻り

○ねり込

○金岐　かなげ、ともいふ

○鏡石　卯花のしら浪高くこえたるは誰かなけかけし岸の岩橋　直　兄

○せゝと

○傳兵衛岩

○八疊岩

○烏帽子岩　いと深く水にうつりし紫の岸のふし波かけ緒ともみゆ　識人不知

○くゝす岩

○ちあみ　立渡る波はきぼひて行ふねの道はみなから岩間なりけり　内直

○屏風岩　春は花あきはもみちとかゝるのは屏風の岩の名書也けり　湖夕

○たゝら

○はかりが瀬　はかりかせやすく渡せし舟人にいくめしろかねかけて與へん　直兄

○浮田明神社　傳云、上古、丹波國一面の湖なりしを、大山咋神、之を決し土と成すと、故に鋤を以て神の主となせり、

○あゝ塲

○立塲

○内膳が淵　岡部内膳正長盛、龜山在城の時、石堤五十間を作るとこ

○地藏が淵

○女夫石

此を越て、山本濱に着く、此奇石怪岩の間を、紆餘屈折して流下す、實に魂飛ひ、肉踊るの快あり

智福山法輪寺　本尊、虛空藏菩薩、　道昌僧都作、　和銅六年、釋行基の創建に係り、菩提を木上山、高井寺と云ふ、天長六年、道昌僧都、虛空藏求聞持の法を、修せんとて、弘法大師の教示により、此山に參籠せしに、忽ち奇瑞あり、依て虛空藏菩薩の靈像を刻み、更に一大伽藍を造營して、之に安置す、貞觀十六年、寺號を改めて、智福山法輪寺となす、此靈像は嵯峨上皇深く、崇信し給ひし處にして、建永元年三月、行幸ありし事も、古書に見えたり、

暫出二俗寰一尋二諸境一。法輪寺裏發二心情一。青望山月清明影。還怪空傳二隱暗名一。　藤明衡

大ゐ川法の輪くゝる水車われ幾めぐり浮しつむらむ　慈鎮

もろともにきくたにさひしかもひなけかへらん宿の峰の松風　兼好

子供　みよさくらの月も十三夜　嘯山

此寺の門前に架せるを、雖橋といふ

水くらく見えぬ流れの音はして橋にとゝろく夜の川波　爲村

西行櫻舊跡　法輪寺より三町南にあり、昔、櫻の大樹ありて、西行法師、庵室（櫻花庵と稱せしも今はなし）を結ひ、之を愛したりとなり、

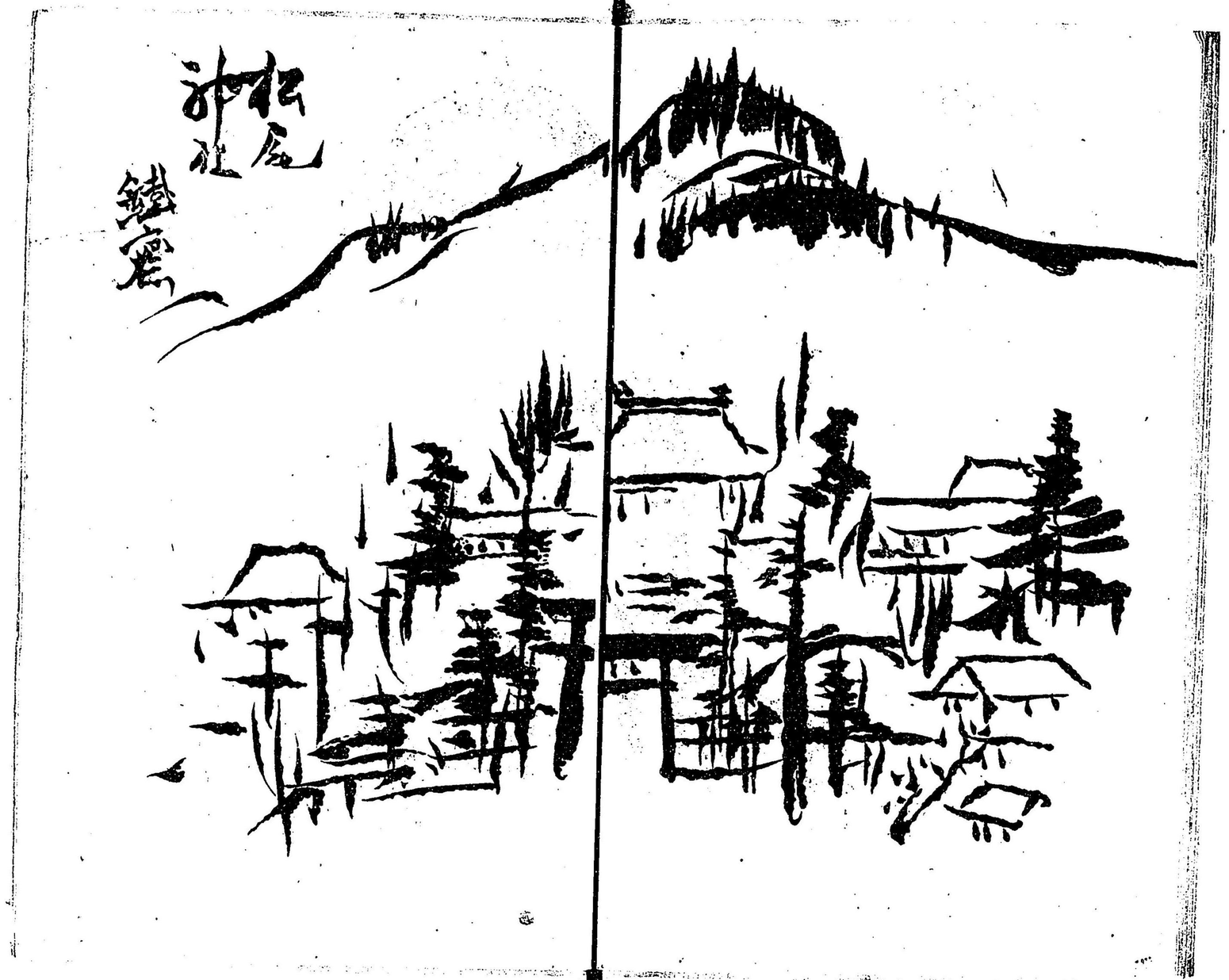
花ゆゑにとむれつゝ人のくるのみをあたら櫻のとがにぞ有ける　西行

西行ト隱小山家。無レ奈世人相逐過。翁應二自責一。櫻何責。錦鋪心腸勝似レ花。　堤谷

松尾大神宮　官幣大社にして、大山咋神、市杵島姫神、二柱を奉祀す、當社は大寶元年、秦ノ都理、始めて神殿を建立し、社殿の乾に、分土山といへる處に、往古、降臨鎮坐の岩あり、御岩か谷と稱す、神詠に曰、

千早振分土山に宮居して天くたること神代よりさき

爾來、賀茂の大社と共に、平安京東西の鎮護として、仰く處、是を以て歴々、勅使等を差遣せられ、奉幣の禮、曾て忘らせられず、又民間に於ては、造酒の祖神として、崇敬し、造酒家の來賽、最も盛也、此地、翁鬱たる松尾山を負ひ、桂川の清流に臨み、社前廣濶、頗る好境に屬す、


鐵窟
神社

れし　しかも　松尾山のあふひ草　桂にちかく　契り初めけん　順徳院

夕時雨　いかにそひとて　葺ね茶し　いろかわるなよ　松尾の宮　後鳥羽院

頃　千早ふる　まつのを山の　陰見れば　けふそ千歳の　はつめ也ける　源兼澄

衣手杜　松尾社の東にありしも、今跡絶たり、神祠のみは、全社の南側に移し存せり、

かりはべて　音にぞ　なくらす　蝉の羽の　夕日もうすき　衣手の　森　爲氏

月讀神社　松尾神社の、三二町南の森にあり、日本紀に云、顯宗帝献二山背國葛野郡歌荒

巣田十五町一以爲二月讀神地一。　三代實録に云、貞觀元年正月廿七日甲申、奉二授葛野郡月

讀神、正二位。

西芳寺　松尾より南十町、字神谷にあり、本尊、阿彌陀佛

聖武天皇、天平年中、釋行基此地を過ぐ、忽ち磬聲あり、怪て至れば、小堂あり、彌陀

三尊を安す、其作を問へば、聖德大師なりといふ、行基之を偉とし、天平三年、勅許を

得て、自ら彌陀の尊像を刻み、先の靈像を、胎中に藏す、是即、西芳寺の因て起る處な

り、建久年間、攝津の大守、大江師員、堂舍を修理し、次に暦應二年其孫親秀、之を再

興す、乃ち夢窓國師を以て中興開山とし、爾來天龍寺に屬す、

此地、具如親王の、山居たりしより以來、種々の古跡に富み、指東庵の如き、最も著名なるものとす、

かくせた、道をは松の落葉にてわか住む宿と人にしらすな　國師

又境内、林泉の幽雅なること、洛中殆んと其比を見さる處にして、春秋、節を見くもの多し、

寒勒梅花々較遲。仲春纔放兩三枝。横斜誰道似漁笠。不釣寂寥唯釣詩。（扣釣叟庵請梅。策彦釣叟庵名也）

杖屨尋春清晝閑。到來奇景始開顏。躊躇不改依然在。檻外長江屋上山。（題春林院内大臣）

むかしはかしこきあたりの御幸もありて　めつらしき君かみゆきを松風にちらぬ櫻の色をみるかな

瑞雲山曇華院門跡（天龍寺の東十町、鹿王院と相隣りす）本尊、觀世音

順德院第三世の王孫、松岩寺左府、善成公の息女、智泉尼、夢窓國師に從ひ、深く禪法に歸し、一院を京都三條東洞院に建てゝ、瑞雲山通玄寺と號す、尼寺五山の一なり、

西方寺
風鐘齋

尼老后更に分庵を營み、之に閑居し、後、二山の號を更め、曇華院と稱す、寛慶三年十一月廿五日、智泉尼示寂す、爾後代々、足利將軍の歸依厚く、屢々其息女を以て、住職たらしむ、延寶年中、後西院天皇の皇女、大成尼公、殿堂を修理し、之が中興たり、文化四年、竹御所の號を賜ふ、維新後、故ありて、嵯峨に移り、今猶、天龍寺派に属す、

覺雄山鹿王院（曇華院の東隣にあり 本尊、釋迦佛 脇士十大弟子）

天龍寺派に属し、禪宗十刹の一なり、康暦元年己未、將軍義滿、一夕、夢らく、一異人あり、告て曰、相公、今年必ず大患あらん、若し一伽藍を建て、寶幢觀音及多聞天を奉安せば、即ち大禍を轉じて、大福を得んと、義滿之を奇とし、一寺を洛西に創建し、覺雄山大福田寶幢寺と稱し、普明國師を請して開基となす、更に院後に一堂を建立し、開山の塔所と爲し之を鹿王院と號す、嘉慶元年十二月、龍欽和尚の開眼を以て、本尊を釋迦佛となし、一時全盛を極めたり、爾來、足利氏と共に、寺門衰替に趣き、寶幢寺の名もいつしか廢絶し、單に鹿王院と稱するに至れり、頃年、嵯山和尚、四方に勸化して、再興の功を擧げたり、

此寺に傳來する處の、佛舍利は、希世の靈寶にして、後光嚴院法皇の叡覽ありて、應安七年、特に綸旨を賜ひたる由緒あり、又水の珠と稱するもの、有名の奇器にして、今猶保存せり、

車折明神社　下嵯峨村に在り櫻宮と稱し清原賴業公の靈を祀れり、傳云普人あり車に乘して社前を過ぐ車軸忽ち摧折す事上聞に達す、後嵯峨天皇叡感の餘り勅して車折明神の號を賜ふ云々

賴業は舍人親王の後胤にして、父を音博士、祐隆といふ、穀倉院別當、大外記正五位下に叙せられ、文治四年四月十四日齡七十七にして卒す、天資聰明にして、三叡聖賢の道に達し、詩歌を能くす、曾て禮記中の、大學中庸の二篇を觀て、是れ必す聖人の、一大學脈の書なるべきを唱ふ、此時未だ二程の說、本朝に聞えす、朱子の章句の如き、公の晩年に當れり、其卓識此の如し、宜なる哉、四朝に歷任し、至尊を啓沃し奉るの功を全ふせしなり、

寶樹寺　熊谷山と號す、熊谷蓮生法師の開基にして、往古は粟生光明寺と共に、洛西の一大寺なりしも、今は甚衰替して、一小庵となれり、然れとも本尊、阿彌陀佛は、頗る大作にして、寺のむかしを思ハしむ、釋迦の臥像一体は、未だ作者を詳にせずと雖も、非常の巨腕に非されは能ハす、或は云、弘法大師の作と、此寺の前に架せるを安堵が橋といふ

夕立や安堵か橋の迎ひ傘　松山

阿刀神社　安堵橋の北、半町に在り、延喜式内といへども、其事歷を詳にせず、

題目石　寶樹寺の西、一町の路傍にあり、日像上人の建てし處なり、

齊宮　嵯峨の入口、生田にあり、伊勢齊宮の舊跡にして近頃、里人社殿を再營せり、

有栖川　齊宮の西を流る、小川なり、

いさしらすみつねはて、に有栖川君か御幸にけふこそはみれ　躬恒

有栖川おなし流れはかハらねと見しやむかしの影を忘れぬ　中院右大臣

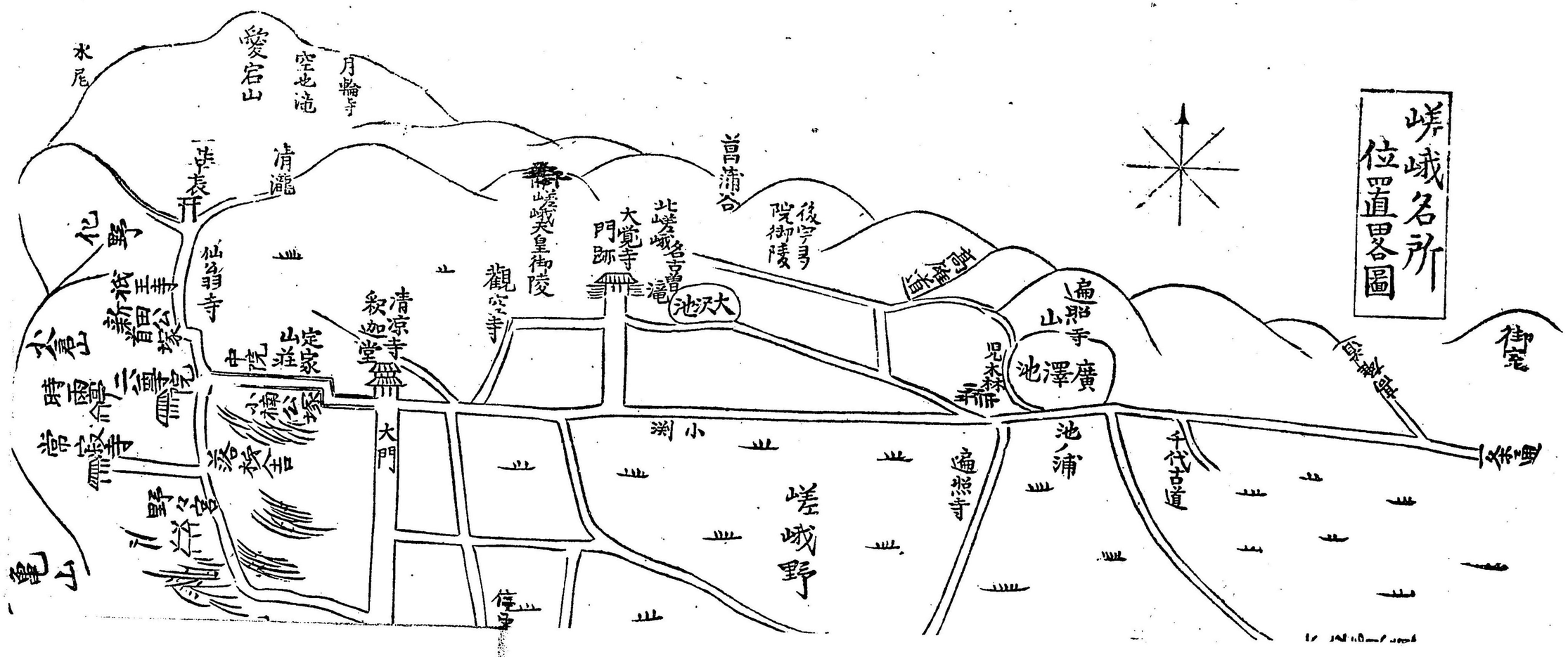
すみけりな五器洗ふ水の有栖川　大祇

人聲か瀨音か花に早や近し　梅通

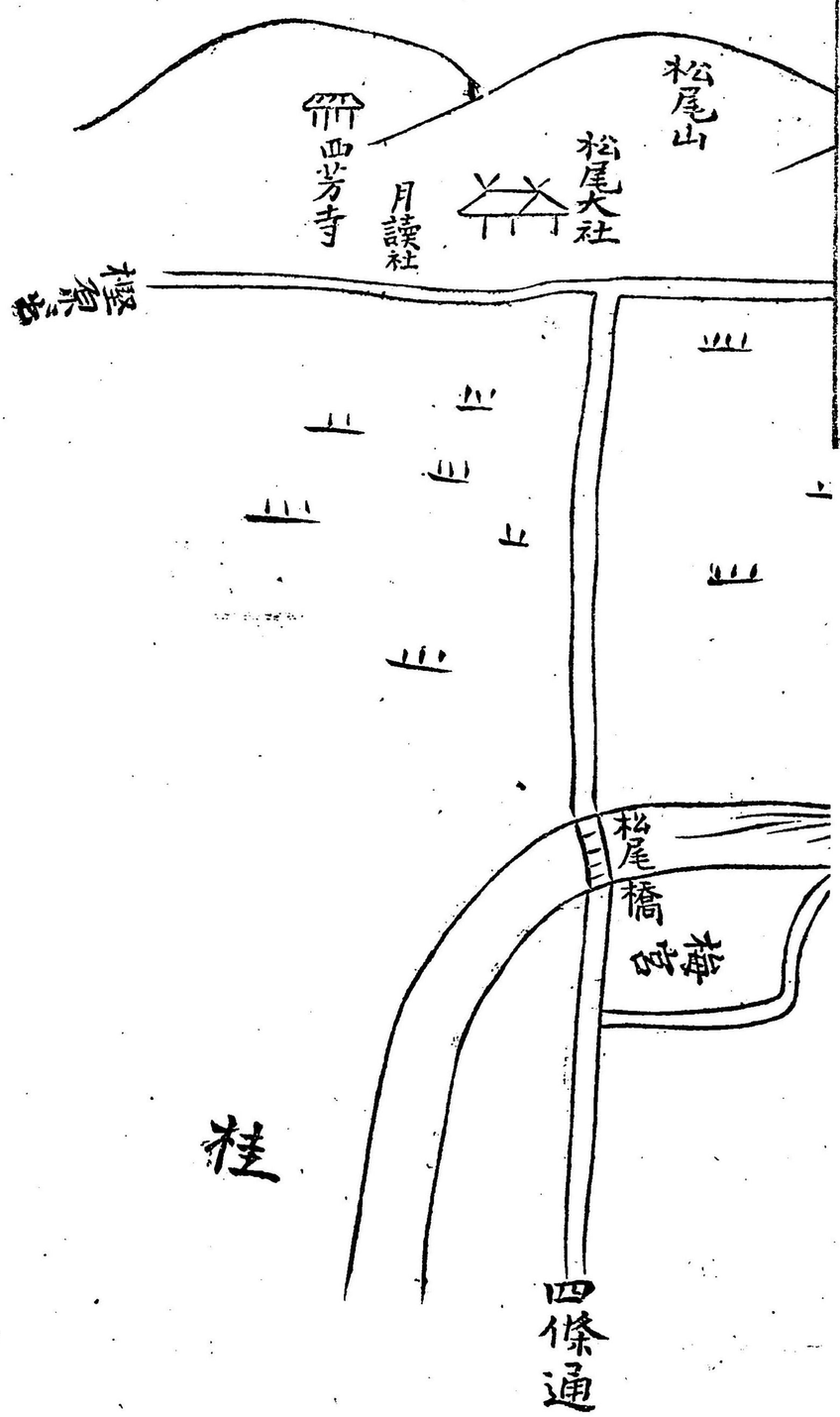
帷子の辻　太秦と上下嵯峨の分岐点なり

右あたこひたりも、花や盛空藏　淇北

嵯峨名所位置畧圖


水尾
愛宕山
空也滝
月輪寺
清瀧
一本長開
仙翁寺
新田公塚
定家山荘
清涼寺
釈迦堂
大門
観空寺
嵯峨天皇御陵
大覚寺門跡
大沢池
名古曽滝
菖蒲谷
後宇多院御陵
亀山殿
遍照寺山
広沢池
児木林
小渕
嵯峨野
遍照寺
池ノ浦
千代古道
御室
亀山

大門
小渕
嵯峨野
遍照寺
池ノ浦
千代古道
信玄塲
法王院
臨川寺
琴聞橋
車折神社
有栖川宮
帷子辻
太秦
小督墓
三軒家
後鳥羽院御陵
天龍寺
嵯峨山
桂川
大堰川
桂川
梅津
豊殺田
松尾山


松尾山
松尾大社
西芳寺
月讀社
桂川
松尾橋
桂
四條通

孔孟之間卷

雌

太秦廣隆寺

廣隆寺の事を叙するの前、先づ太秦なる地名の、由來を問はざるべからず、古語拾遺に云

秦公祖、弓月、率二百廿縣民一而歸化矣、漢直祖、阿知使主、率二十七縣民一而來朝焉、秦漢、百濟內附之民、各以萬計、足レ可二褒賞一、皆有二其祠一、未レ預二幣例一也、中略至二長谷朝倉朝一、秦民分散、寄二隷他族一、秦酒公、進仕蒙レ寵、詔聚二秦氏一、賜二酒公一、仍率二領百八十種勝部一、織貢レ調、充二積庭中一、因賜二姓字豆麻佐一、

溢し積むに從て、埋み益すの義乎、夏貢く處の絹絹、肥膚に適す、故に秦の字を訓して、之を波陀と謂ふ歟、　或は云、太秦は太子の太の字と、秦川勝の秦の字とにより作りしと、

乃ち知る、太秦の地名は、字を歸化人の姓に取り、義を調貢の品量に乘りし事を、是一見、牽强附會に類するが如きも、事物名目の原始、大抵此の如し、深く論議の要なからんか、

廣隆寺は、蜂岡寺（其他秦公寺、桂寺、三槻寺等の號あり）と稱し、洛中第一の古刹なり、推古天皇十二年秋八月朔、聖德皇太子、秦河勝に語て宣ふく、吾れ昨夜夢らく、是より北の方十餘里を距て、美邑に至る、楓林絢爛、異香充滿せり、其林中に入るに、一大杇木あり、五百賢聖、常に來集して、般若理趣分を讀誦す、或は天童、虛空より飛ひ來て、妙法を宣說す、殊勝の僧に供養す、又杇木より、常に光明を放ち、微妙の音聲を以て、妙法を宣說す、殊勝の靈地なり、而して此楓林は、實に汝が領地に屬す、吾今將さに往かんとすと、川勝、頓首再拜して曰く、臣が邑、恰も御夢の如し、早く行啓御覽あるべし、即日、駕を命し、河勝先驅し奉り、此地に到りしに、果して楓林中に大桂木あり、異香芬馥、其樹空虛にして、奇瑞の寶閣あり、光明赫々、其中に蜂虫多く聚て、奇聲を發す、近鄰の兒童、之を拂へども盡きず、然るに太子の御目には、此群蜂も千二百の大阿羅漢、集會して、法花、勝鬘、維摩等、大乘經の要文を、講演すと見ゆ、太子甚た之を奇とし、直に仮宮（桂宮院是なり）を造り、而して後具さに奏聞に及ひ給ふ、即ち秦の河勝に勅して、一寺を創建し蜂岡寺と號し、新羅、百濟より獻する處の、佛像を安置し玉ふ、（廣隆寺緣起に據る）

上宮王院、即、太子殿には、太子御自作の、木像を安置し其衣冠は、歷代天皇よりの御寄進に係る、殿舍は近頃、有志の義財を以て葺修し、輪奐の美を極めたり、

金堂に安する、金銅救世觀音像は、推古天皇十一年、百濟より之を獻し、更に河勝に賜ひしものにて、廣隆寺本元の靈佛なり、

金銅彌勒佛は、推古天皇廿四年、新羅より渡來、仝くく河勝に賜ひしものなり、

藥師如來の像は、絕世の靈佛にして、今其緣起を尋ぬるに、西山にて乙訓社あり、昔、一樵夫社前に憩ひける間に、一個の梂杭を見て、之を以て佛像を作り、南無藥師佛と稱し、社殿に入れ奉る、頗る奇瑞あり、庶民恭敬す、時に大原寺に大德あり、智威といふ、延曆十二年十二月、此靈佛を奉して、大原寺に安す、仁明帝の御宇、勅あり、更に願德寺に安す、滿和天皇貞觀六年、御惱みあり、廣隆寺道昌僧都に勅して、祈禱せしめ玉ふ、道昌即ち願德寺の藥師佛を迎へて、祈願せしに、忽ち御平癒あらせらる、又大堰川暴漲、土民大に困せしとき、再ひ道昌に勅して、之を祈らしむ、河伯即日降り、京洛安穩を得、是より靈像永く、尙寺に留り玉ふ、云々

大講堂（永万元年の再築に係り七百余年来の古建物なり）には、丈六彌陀佛（僧賢、造作）、虚空藏菩薩、地藏菩薩像を安せり、

太秦殿には、秦川勝及、漢女吳女を祀れり、

其他、希世の古佛雙像、枚擧に遑あらず、

周防内侍

かくしつゝ、夕の雲となりもせはあれかけても誰かしのはん

人とゝろうつまさに猶いのりけん戀のやまひもやめさらめやは

賴政

桂宮院は、楓野の別宮と稱せしものにて、太子廣隆寺、創建迄の仮殿也、（上宮御自作の如意輪觀音像、此に陪し奉る）

（太子、欽明帝に献ずる處の、彌陀佛と安置す、）

建築古雅、最も愛すべし、

古寺經過感二替隆一。殘僧尚說昔年功。三韓大士來傳法。百濟眞人去御レ風。白晝烟薰金佛像黃昏鼠上鐵燈籠。祇陀太子千秋後。捨レ樹悲レ誰起二廢宮一（空花集）

舊時樓閣勢穹窿。結搆當年費二幾功一。隋國傳來留二佛像一。衡山收去仰二高風一。猶蜂釀レ密仍殘レ蠟。放鶴沖レ雲已出レ籠。媿我不才追二二老一題レ詩攀レ桂到二蟾宮一（同上）

廣隆寺に於て、例年十一月十二日、執行する所の牛祭は、實に奇中の奇、妙中の妙とも謂ふべき祭禮にして、土俗の諺にも、「見るも阿保（惡）見ぬも阿保（ナホー）」といへり、當日行列の主人公たる、摩陀羅神の朗讀する祭文（傳云弘法大師作）は字々奇、句々妙なれば、編者は阿保の名を甘受して、茲に掲記せむ、蓋し書くも阿保、書かざるも亦阿保なれば、寧ろ書くの阿保に、從いんと思へばなり、

祭文

夫れ以みれは、性を乾坤の氣にうけ、德を陰陽の間に保ち、信を專らにして、佛につかへ、愼を致して神を敬ふ、天尊地卑の禮を知り、是非得失の品を辨ふる、是偏に神明の廣恩なり、因レ茲、單微の幣帛をさゝけ、敬して摩吒羅神に奉上す、豈神の恩を蒙らざるべけんや、是に依て四番の大衆等、一心懇切を抽んて、十抄の儀式をまなび、萬人の逸學を催すを以て、おのづから神明の法樂に備へ、諸衆の感嘆をなすを以て、暗に神の納受を知らんとなり、然る間、さいつち頭に木冠を戴き、くわひ羅尼に舊鼻高をからげつけからめ、牛に鞍を置き、大鬪をすりむいて、かなしむもあり、やさ馬に鈴をつけておどるもあり、はねるもあり、偏に百鬼夜行に異ならず、如是等の振舞を以て、摩吒羅神を敬祭し奉る事、ひとへに天下安隱、寺家安泰の爲め也、因レ之、永永く遠く拂ひ退くへきものなり、先は三面の僧坊の中にしのび入て、物取る錢盜人めき奇怪すはいふはいや、小童とも木々のなりもの取らんとて、あかり障子打破る、骨なき法師頭もあやうくそ覺ゆる、扨てはあさ腹、頓病すいふき、疝癪、ようさう、鬪風、こゝには尻癬（しりかさ）、虫かさ、濃癬（うみかさ）、あふみ癬、冬に向へる大あかり、并にひゝいかひ病

鼻たり、おこり心地具つちさわり、傳屍病、しかのみならす、鐘樓、法華堂のかわづるみ、讒言、仲人いざかひ、合の中間言、貧苦男の入たけり、無能女の嬬ありき、又は堂塔の檜皮、喰ひぬく、大烏小烏め、聖敎やぶる大鼠小鼠め、田の畦うがつうごろもち、如此の奴原におゐて、永く遠く、根の國、そこの國まて、はらひしりぞくへきものなり、敬白謹上再拜、

井浚井戸（さらひのゐと）　桂宮院の坤にあり

いさらゐのふかくの事はしらねとも清水そ宿のあるし也ける　和泉式部

大酒神社　太子殿の東、松林中にあり、大酔又は大裂に作る　秦始皇の祖神也、仲哀天皇御宇、項滿王來朝して、之を奉る、神驗著しきを以て、後冷泉院、治暦四年四月、正一位を授け玉ふ、

木嶋神社（このしま）　廣隆寺の東二町、木島の森一名蟹森にあり、祭神、天照御魂神なり、三代實錄に云、貞觀元年正月廿七日甲申、奉授木島天照御魂神正五位下。又廣隆寺緣起に據れは、長久四年五月十日、被授正一位、

此地、樹木蔚蒼として、晝猶暗く、洛西第一の古森也、又社側に、清泉涌出す、元紀と稱す、

何事も元た、すなる神ならはむかしにかへせ敷しまの道　景樹

常磐（ときは）**の里**　仁明帝の御弟、左大臣源常公（トコ）、山莊のありし處なり、

西嶽暫出紅塵外。素律云蘭欲ニ汙陰一　中原廣俊

花さかぬときはの山の峰にたに櫻をみせてかゝる白雲　宗尊親王

初聲は都にいそけはと、きすときゝの森の松はふりにき　家隆

さか野なる常磐林の名のみしてうつろふ色に秋風そふく　大納言實冬

誰すみてあゝれしるらんときは山奥の岩ほの有明の月　道濟

法金剛院　常磐の東、双岡の南にあり、四宗兼學本尊丈六彌陀

初め、右大臣清原夏野公山莊を、佛寺となし、並岡寺と稱せしも、天安年中天安寺と更む、其後久しく替廢に及ひしを、待賢門院之を再興し玉ひ、更に其名も法金剛院と改む、往古は境内、方四町もある大寺にして、かしこきあたりの、御幸もありし程なるに、年代荒唐、今は甚だ縮少し、僅に其跡を留むるのみ、

故さとに けふ來さりせは 子規 誰とむかーを繼てなかまし　仁和寺・法親王

もみちみて君か袂やしぐるらん昔の秋の色をしのひて　西行

君か代を長月にしもしらきくのさくや千歳のしるし成らむ　法性寺入道

待賢門院の陵は、法金剛院の北にあり、

夕されはわきてなかめん方もなし烟とたにもならぬ別れゝ　堀河

正法山妙心禪寺

双岡の東御室の南にあり、臨濟宗五山の一なり、

當寺は、花園天皇離宮の地なり、曆應元年大燈國師に勅して、離宮を革めて、禪苑となし、關山國師をして、開祖たらしめ給ふ、國師卽ち聖旨を奉して、正法山妙心禪寺の號を進む、蓋し拈花微笑の因緣を用て、天皇を梵王に配し奉り、花園を一枝に擬し、關山を稱して、迦葉師兄と爲すなり、天皇御落飾の後、別に一院を建立し、此に幽棲し玉ひ屆して玉鳳院といふ、又舊宮を稱して、鱗德殿といふ、實に洛西の巨刹にして、堂塔伽藍今に完備し、方丈、庫裏、寢堂、法堂、佛殿、浴室、開山堂、唐門、山門、勅使門等、何れも輪奐の美、結搆の壯、修飾の麗、至れり盡せり、又塔頭の現存せるもの四十餘あり、

境内に翁鬱たる、雪江の松は、第六世雪江和尚の栽る處、四百餘年の霜雪を凌ぎ、今猶

亭々雲漢を擡くの概あり、

傳二如來正法一坐二玉鳳禪宮一稽二首花園帝一萬年護二日東一（後花園院先花園帝葬斂之宸筆）

關山國師小傳

國師姓は源氏、信州の人也、幼にして頴異、鎌倉の廣嚴和尚に就て得度す、壯に及て洛に遊ひ、大燈國師の名聲を聞き、直に其丈室に抵り、禮拜問答し、忽ち雲門關の字を悟得す、大燈手を拊て曰く、汝は眞に雲門大師の再來なりと、乃ち關山の號を與へ尋て藏主の職を領せしむ、時に後醍醐帝大燈を召す、燈偶々不安なり、因て關をして召に應せしむ、奏對旨に稱ふ、元德二年濃州に入り居る事數年、一日太上天皇大燈に法嗣第一の者を問ひ給ふ、對て曰く、慧玄藏主卽其人なりと、上皇乃ち花園の離宮を捨て禪苑となし、關山を以て住持たらしめ又其傍に玉鳳院を建て上皇親ら住ませ給ふ延文五年十二月十二日關山齡八十四を以て化す、圓成國師の諡號を賜ふ、

雙岡（ならびおかのおか）

・妙心寺の西に、一陀の林巒あり、雙岡と稱す、

いろ〳〵にならひの岡の初もみち秋のさか野のゆさ〻にそみる　後宇多院

ふりまさる年をかさねてみつるかな並の岡の松のしら雪　大僧正禪助

ともすれは霞のかけにかくれけりふたり並ひの岡のえの松　源樹

兼好法師舊跡　並岡の東麓、長泉寺是なり、始めは岡の西麓に在りしも、其後今の處に移せしなり、

兼好は藤原謙足十九世の裔、右京太夫卜部兼名の孫、兼顯の子なり、從五位下に叙せられ、院の北面の武士たり、一日上直に當り、萩の戸の屋上に怪鳥を射て、壯名を博ふす、又歌文の蘊奥を極む、延慶五年、後宇多院崩御の後、世を厭ひ、觀世寺山楓葉色、願レ身秋露草中風、と嘯き薙髮して諸國を行脚す、歸りて洛東吉田に幽棲を占む、尋て康永二年此の並岡に來り、一草庵を結ひ以て自ら遣る、彼の文學界に嘖々たる徒然草は實に此に成りし也其後伊賀權守、橘成忠舊友の故を以て、兼好を招き、伊賀の國見山の麓、田井庄に於て一庵を造り之に居らしむ、觀應元年二月十五日行年六十二を以て彼地に沒す、侍童命松丸、分骨を請して、並岡に返り、此庵後に葬る、

双岡に無常所をまうけてかたはらに櫻を植さすとて

ちきりたく花とならひの岡のへにあれ幾世の春をすくさん　　兼好

大龍山龍安寺　仁和寺の東北十町にあり、妙心寺派に屬し、所謂十刹の一なり、此地舊と、德大寺公有公の別莊なりしを、文明五年、細川右京兆勝元、請ふて一禪刹となし義天和尚をして住持せしむ、和尚更に其師、日峰禪師を奉して、開祖となす、此地、北に山嶺を背ひ、前は平濶なる田野に接す、境內幽靜にして、庭池の間鷗、夢濃か也、春色閑時意自知。花前開レ宴共相歌。綠レ絲欲レ繫二好風景一。情似二櫻樹頭緒多一。五鳳集　仁如

義天禪師小傳

義天諱は玄詔、土州の人、蘇我入鹿の後裔なり、十五歲にして義山和尚に拜禮し、十八歲にして、洛東建仁寺に入る、後、東游して、瑞泉寺の日峰禪師に參し、付法を受く、細川勝元深く師に歸し、遂に龍安寺を創し、之か住持たらしめ、又丹波八木に一院を建て、常に二寺の間に往來せしむ、寛正三年三月十八日、壽七十を以て寂す、

等持院　龍安寺の巽、衣笠山の麓に在り、天龍寺派に屬す、本尊釋迦佛、運慶作　曆應年間、足利尊氏の創立に係り、夢窓國師を以て開山とす、長祿年中、替廢に及びしを、將軍義政中興す、此を以て足利氏累代の廟所たり、又彼の有名なる、將軍十三代の木像、今に現存せり、此地、衣笠山の翠黛を負ひ、泉石の幽趣に富めり、

天公省レ事巧相違。北寺花多南寺稀。百萬買レ隣今不レ惡。袈裟角裏二落紅一飯。五鳳集　閑坡

衣笠山　等持院の後にあり、古來吟遊の勝地なり、

雨ふれともえのみまさる早蕨や衣笠やまのしるし成ちん　　爲盛

墨染のきぬかさ山の夕けふり立のぼるにも袖はぬれけり　爲秀

山麓に小詞あり、衣笠丘の御墾と稱す、

神まつるきぬ笠かの岩ね松久しく立てれときはかきわに　隆房

大内山仁和寺門跡

洛の中外に於て、古來門跡、若くは御所號を用る處、少しとせず、然れども、大抵は至尊の一時、臨御あらせられしか、又は一二世の間、法親王の御住院たりしか、其他、單に寺門の興立を、至尊の叡願に發せし等にして、甚しきに至ては、外戚瑞權の跋扈に隨伴して、寺門の全盛を買ひ、强ひて皇室の御由緒を作り、以て世を瞞し、俗を紿くが如きものなきに非ず、御室仁和寺、嵯峨大覺寺の如きは即ち然らず、此三院は共に純然たる、皇居の聖跡たるのみならず、千歲の久しき、代々法親王の住院にして、間々撰錄より出たること、なきに非すと雖も、是れ不得已の場合に限り、即ち例外なりとす、是を以て此二寺の如きは、門跡號は勿論、御所號を用ゐ來りしも、實に當然の事にして、決して他門と混同すべからざる也、僧服記に云、

門跡者仁和大覺両寺也、仁和寺宇多天皇御當歲、大覺寺者後宇多院御遺跡也、故稱御門跡者限此二寺也云々

二寺に限るといふに至ては、稍過言に失するの、嫌なきに非ざれども、亦以て両門跡の他に卓絶する處を見るに足る、

仁和寺は、孝孝天皇の勅願、寛平法皇の御室にして、御室御所と稱す、初め、孝孝天皇の叡願によりて、小松郷大内山の麓に於て、一寺を創建し、本尊阿彌陀佛を安置す、仁和四年八月、御供養ありて、大内山仁和寺と號す、其後、延喜元年十二月、宇多法皇、更に一室を御造營、此より遷御、深く密法を究め給ふ、御室の稱此に起る、而して之を當寺の開祖となす、爾來代々、法親王、連綿御相續あらせられ、總法務の宮たるの故を以て、常に僧門の首位を占む、天曆六年三月、朱雀天皇御落飾、當寺に入御あらせられ、永觀元年三月、圓融法皇の叡旨により、寺内に圓融寺を建てられ、天治元年、覺快法親王、多寶塔を造られ、長德四年、一條天皇の御願によりて、圓教寺を起され、天喜元年十月、後朱雀院の勅願に依りて、圓乘寺を建立せられしが如き、其他大小數十箇院の塔頭、及別院、何れもかしこき邊りの、御創建に係らざるはなく、一時規模宏壯、他門に

起越するの勢なかりしも、應仁以后、回祿を重ね、全く舊觀を失するに至れり、降て寛永年間、德川氏莫大の資を獻し、殿堂再營の擧ありてより、莊嚴大に復舊せしも、明治二年五月、火を失し、寢殿庫裏等、一時に烏有に歸す、惜みても尙餘ありと謂ふべし、然れども、金堂、御影堂、五重塔、鎭守九所明神祠、中門、南大門等、今猶輪奐の美結構の壯を存し、嚴然として、洛中の一大觀たるを失はず、加之、境內櫻樹、甚た多く、暄陽三月吟杖を曳くもの、絡繹として絶えず、

尋ね入る宇多野の風をうけてこそ法を傳へし宿はしめけれ　宇多天皇御製

三千代をかさねてゆつれ君を祈る小松の里の鶴の毛ころも　喜多院二品親王

しら雲の九重にたつ嶺なれは大內山といふにそありける　中納言兼輔

あたりまて三室の山は長閑にて松風にはふ宿の梅か枝　敦遠

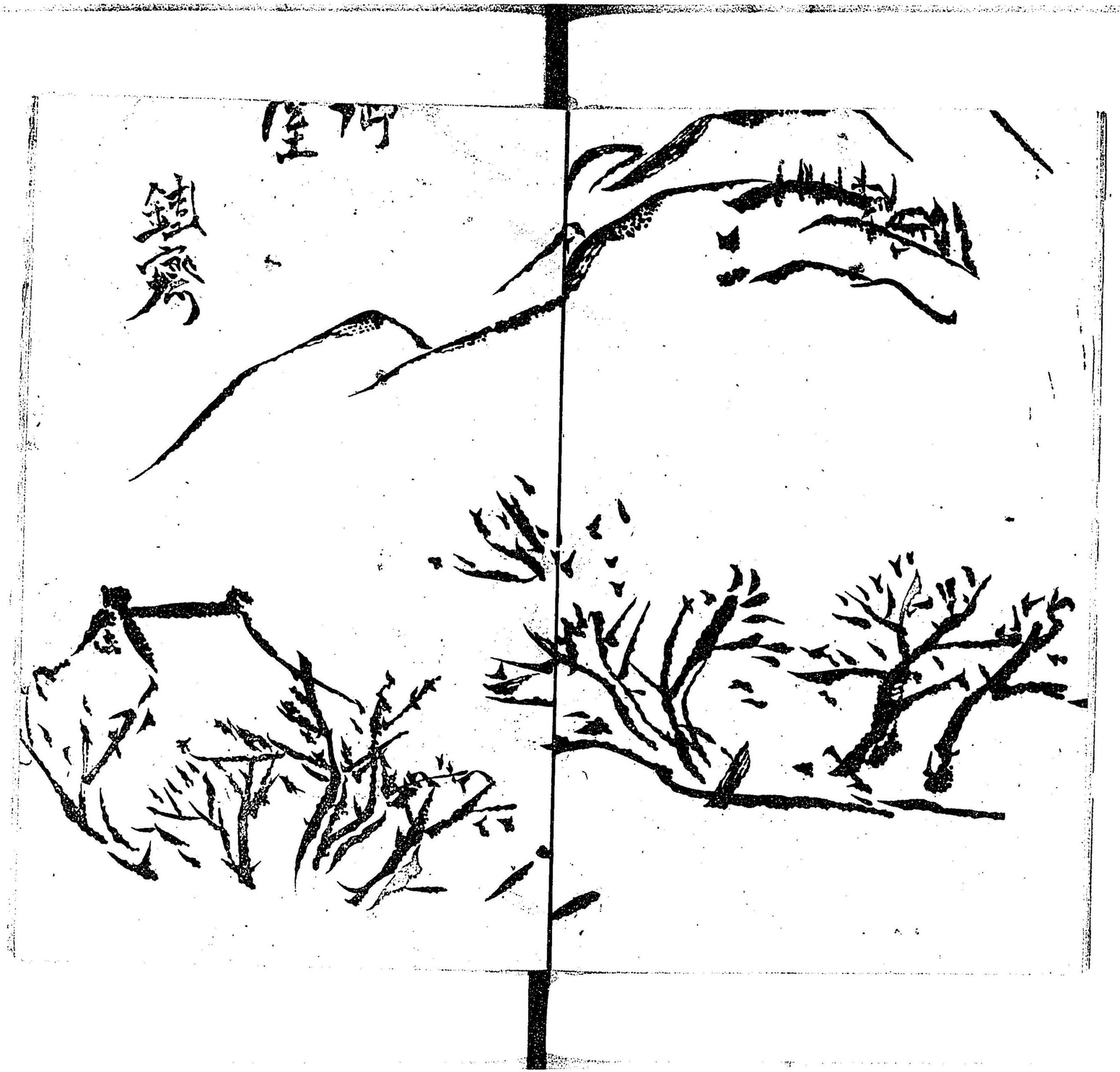
山里の秋のわかれのかなしさは鹿さへ聲ををしまさりけり　後德大寺

とひすてゝかへらんものか山さくら宿にうつろふ花なかりせは　榮雅

ぬしなくてあれのみまさる山里にさかりとみゆる花櫻哉　六條修理太夫

花のちる下ゆく水の底みれはかけには涙を風となりける　俊頼

山櫻まさかすともみえぬ哉朝ねる雲のたえぬ限りは　源大府


阿生
鐵寶

荒籬見レ露秋蘭泣。深洞聞レ風老檜悲。和漢朗詠集 源英明

戟ヲ轄載テ脂出ニ洛陽一圓融古寺疏ニ風光一境應ニ仙洞桂林紫。地是帝京柳葉黄。秋日圓融院御幸 藤敦基

棠梨嶺遠雲霄雪。楊柳寺深天祿塵。暮春遊西山古洞三宮

遊ニ大敎道場裏一更怪此時到ニ五臺一。冬日遊大敎院三宮

吾々も花に袖する御室かな　閑更

八十八箇所

仁和寺の後の山に散在せり、文政十年、四國の靈場に擬して、造營したるものなり、

諸帝陵　光孝・宇多、後朱雀、一條、圓融、諸帝の御陵は、仁和寺の四周に散在せり、

宇多野　仁和寺の邊を中心として、四方に開けたる、一帶の平野を總稱す、嵯峨野と共に、古來の名區たり、

はし鷹のみよりの翅身にそへて猶雪はらふ宇多の御狩場　家陸

宇多の野に鳴か羽かく音高しわなはる人のきゝもてそすれ　景樹

むかしは氷室もおりじにや

涼しさは外にもとゝす山城のうたの氷室の槙の下風　入道前太政大臣

分てけに平野の杜の近けれはうたの氷室は千代もたえせし　宋雅

福王寺神社　仁和寺の西三町にあり、

鳴瀧　仁和寺の西北にある里にして、往古に所謂小松庄の内なり、小川あり、南北に貫流す、

しはしこそ人めつゝみにせかれけれはては涙やなる瀧の川　西行

なる瀧や西の川瀬にみそぎせん岩こそ波も秋や近きと　俊成

法輪山了德寺　鳴瀧の里にあり、（宗六谷派本尊阿彌陀佛、俗云、聖德太子作）親鸞上人の遺跡なり、傳云、上人常に師の法然上人を嵯峨月輪寺に訪ふ、建長四年十一月の頃、月輪往返の途次、一日此地に於て、衆生を集めて、他力念佛を勸化す、聽衆中六人の者殊に深く之を歸依し、此里の名産なる大根を養て、饗しければ、大に上人の意に適ひ、即立て庭前の芒穗を採り、歸命盡十方无量光如來の十字を染筆し、之を與ふ、世に之を護、の名號と稱す、依て一庵を結ひ、此名號を奉置す云々、其後、大永四年二月、實如上人、此遺跡を慕ひ、草庵を改築し、了德寺と號け、時の庵主正西を以て中興開祖たらしむ、降て文政年間、大谷派本山より、鳴瀧御坊の名を付す、又毎年十二月九日、大根を焚て、宗祖に供じ、併せて有衆に施與するの例により、大根焚御坊と通稱せり

西谷山專念寺　大根焚御坊の東隣にあり、初め光明寺と稱す、西山四派の一、西谷派の祖、法興上人の開基にして、往古は境内廣濶、堂舍亦輪奐の美に富みしも、今は甚だ縮少して、僅に一院を留む、西谷堂即開山堂、及其廟所は、寺側に在り、

法興上人小傳

上人、名は滑音、唐橋大納言の孫、宰相中將雅清の子也、仁和寺の西谷に、光明寺を創建し、以て宗義を敷宣す、嘗て後嵯峨院の、叡旨を奉ーて、愚要書を撰し、以て一派を掬む、之を西谷派といふ、後、東山に遷居し、興教怠らす、文永八年五月廿二日を以て寂す、享年七十、

正覺山妙光寺　鳴瀧の東北、七八町の山腹にあり、法燈禪師の開基にして、建仁寺派に属す、初め、花山内大臣藤原師繼、長男、右少將忠年の夭死を痛惜し、北山の別業を捨てゝ、一禪刹となし、法燈禪師を請して、開山たらしめ、寺號を忠年の幼名に乘り、妙光禪寺とし、花に扁して歳寒といふ、實に永仁年間の事なり、又、忠年の弟、法諱心性及大納言師信、兄弟ともに、禪師の徒弟と爲り、財を捨て力を戮せ、師の爲めに壽塔

を建つ、其後、幾多の星霜を經て、今は甚だ荒廢すと雖も、猶廣大の地城を占め、轉た往古を追懐せしむ、

仁和古寺小統州。寺亦北山宜二淡遊一。風露桂花吹未レ老。天香一種鷲峰秋。五山集 瑞溪

南國帝師行道隣。千年秋色染二山容一。登臨始識金慈近。碧瓦初寒早報レ冬。今集 江西

めづらやいさ此世の外はさら雲のたつ名みつてふ月の秋風　長嘯子

法燈禪師小傳

禪師、名は覺心、性は常澄、信州の人也、初め、高野山に上り、密教を究め、後、禪門に入る、宋に航して、佛眼禪師に見え、心即是佛佛即是心の示を禀け、建長六年歸朝す、屢々龜山上皇の奉願を辱ふし、詔して洛東勝林寺に居らしめ給ふ、禪師固辭して請けず、潛に紀州の舊院に歸る、永仁三年、諸徒の請する處となり、洛西鳴瀧に於て一庵を結び之に居る、妙光寺是なり、仝六年十月十三日寂す、

院後の山上に一堂あり、印金堂と稱す、内壁滿面、金箔を印し、粲爛人目を眩せしむ、今は甚だ廢圮に委し、箔の如きも、いつしか草賊の剝脱する處と爲れり、惜むに堪えたり、此堂舊と、紫金臺と稱し般若寺（仁和寺の別院）の僧正、建立して法燈禪師に付せしもの也、

あさく出し心の水や澁ぶらむ　すみ行まゝにふかく成る哉　西行

村上天皇御陵

妙光寺の山上に在り、

泉谷西壽寺（いづみだに）

妙光寺の西北、泉谷の山腹にあり、（本尊阿彌陀佛、惠心作）當寺は、鳥羽院の皇子、覺性法親王の御室、即、泉殿の舊地にして後世寛永四年十一月、袋中良定上人、堂宇を再建し、爾來知恩院末に屬し、淨土宗代々相續せり、此地、三面山嶽を以て圍まれ、南は濶然廣野に開け、頗る眺望に好し、

ありしよの松のみとりのけしきさへうき身は頼む陰なかりけり　守覺法親王

海雲山法藏寺

泉谷の西の山腹にあり、黄檗派に屬し、舊と紀伊郡竹田にありしを、寛永年間、百拙和尚、此處に移し、近衛公の寄進に係る、堂舍を轉營す、此地眺望甚だ佳なり、

百拙名は元養、字は釣雪、葦菴と號す、俗姓辻氏、京師の人なり、黄檗に入て僧となり、近衛家凞公の歸依を受け、屢々對話す、公爲めに一宇を開かしむ、法藏寺是なり、詩歌及茶事を能くし、又畫を嗜む、蘭の畫多し、寛延二年二月十三日歿す、行年八十有三、

五智山蓮華王院

鳴瀧の西隅の山上にあり、始め、宇多天皇の勅願によりて創立し、

仁和寺別院の一なり、圓融院の御時、皇后藤原遵子、懷胎に方り、住持觀賢僧都、勅を奉して當寺の不動尊に祈願し、御安産あり、於是、知行並に山林境内等を賜ふ、其後、應仁の兵火に罹り、不動尊の石像を除くの外、本尊五智如來像及堂宇僧坊、悉皆烏有に歸す、寛永の頃、大盜賊樋口平太夫なるものあり、伊勢の産にして久しく江戸に住み、剽掠至らざる處なかりしが、從者と共に遂に捕へれ、既に鈴か森に於て、刑場の露となるべかりしに、不思議にも遁れたりければ、平太夫私かに念らく、是、年來信仰せし不動尊の加護なるべしと、乃ち廻國修行を決し、諸方を勸化し、遂に仁和寺御所に請ふて五智山蓮華王院を再興し、又石工に命じて、五智如來の石像を始め、二十五菩薩十三佛等を刻ましめ、自ら之を山上に運ひたりとなり、是等の石像は、非常の大作にして、洛中稀に見る處なり、又右の不動尊像は、院後の巨巖を切穿して、其中に安置す、安産の靈驗著しとて、拜禮者絶ゆ、

山上は四望廣濶、東は三十六峰、京洛の全景、南は桂、淀遠きは攝河の峨眉、西は嵐嶽龜峰及嵯峨野、北は即、三尾の連山指呼の間に在り、登臨の好景、實に地方第一と稱しつべし、

金映山三寶寺 鳴瀧の奥、高雄道より二町の山腹にあり、舊と鳴瀧家私領の地ながらも、寛永四年三月、今出川右大臣經季、今城大納言爲尚、両卿の發願により、一寺を創建し、大僧都日護を以て開山とす、（日護は丹後の産、佛工の妙手なりと、）初め、塔頭十二院もありしが、今は替廢して、僅に本寺をとどむ、寺内に仁孝天皇の皇子、常寂光院の御墓所あり、

宅間法印塚 鳴瀧の奥、高雄道の傍にあり、宅間法印澄賀は、畫圖を能くし、神妙に至る、栂尾高山寺に、春日住吉二神の像あり、相傳ふ、二神來て法を明惠上人に受く、宅間之を見んことを請ふ、明惠曰く、是れ凡眼の得て拜する處に非ず、強て之を拜せば、恐くは害あらんと、然るに宅間猶諸ふて已まず、上人乃ち姑らく之を許す、宅間坊に見て模寫し、京に歸る、果して途に落馬して殁す、云々卽此處なり、

平岡八幡宮祠 鳴瀧の西北、梅が畑邨の入口に在り、諸社根元記に據れば、大同四年十二月十日、從五位藤原冬明、勅使として宇佐宮より高雄神護寺に詣向し、同年此地に

勅請す、建久元年、文覺上人古跡を尋ねて、社殿を造營せしものなり、社祠に奉祀せる御形像は、弘法大師第二寫本なりといふ、

高雄山　平岡八幡宮より二十町、今は新道開け、三日坂の險を攀づるを要せず、秋霜九月、滿山の楓樹、忽ち錦繡を纏ひ、清瀧川の清波に映する處、實に天下の絶勝にして、筆舌の能く盡す所に非ず、古來の吟詠、枚擧に遑あらざれば、唯其二三を揭げんか、

点々楓林鴉未レ栖。晩來細雨作二新泥一。幽探不レ覺雄峰遠。行盡仁和西又西。　高雄道中作　桂林

洛外秋風溪有レ橋。見レ楓無レ處二杖支一腰。晩稍紅老房々路。嚮者比丘歌者樵。　溪橋發楓　寓里

今は、此雅趣に乏しく、年一年、俗塵高く揚るを見る、嘆すべからずや、

高雄山き上瀧川を底に見て谷かけめぐる　松の下みち　冬　基

もみぢ葉や雪の下てる高雄山　闌更

高雄山神護寺　昔、景雲年中、僧道鏡、佞邪の資を以て、玄扈の上に登り、遂に覬覦を懷くに方り、和氣清麿、詔旨を奉して、宇佐八幡宮に參向し、神託を請ふ、太神託して宣へく、夫れ神は大小好惡不同なり、善神淫祀を惡み、貪神邪瀆を受く、我れ皇緒を給隆し、國家を扶濟せんが爲めに、一切經及佛を寫造し、最勝王經萬卷を諷誦し、一の伽藍を建て、以て凶逆を除き、社稷を萬代に固ふせん、汝夫れ過失する勿れと、清麿大神に對へ、暫て曰く、國家平定の後、必ず後帝に委し、以て神願を果し奉らんと、然るに時の不遇により、身刑獄に降り、遂に荒隅に配せられしも、幸に神明の加護に依り、再び帝都に歸るを得たり、後、田原天皇寶龜十一年、此事を奏請す、天皇叡感斜ならず親ら詔書を製し玉ふ、然るに事未だ行はれずして、御讓位あり、天應二年、重ねて之を先帝に奏す、於是前詔を以て、普く天下に告げ給ひ、遂に延曆年間に於て、私かに一伽藍を河内國に建て、本尊藥師如來を安置し、神願寺と號す、其後清麿の先功を追嘉し、神願寺を以て、定額の寺と爲し給ふ、是れ當寺の因て起る處なり、（緣起に據る）天長元年九月、正五位下河内守和氣眞綱、從五位彈正少弼和氣仲世等、神願寺の地勢、汚穢なるを恐れ、奉請し勅許を得て、此地に移し、更に之を建營す、仝二年寺を以て、僧空海に賜ひ、神願寺を改號して、神護國祚眞言寺と稱し給ふ、而して此地舊と應仁帝の御願寺、所謂、高雄寺なるものゝ、在りし處にして、先きに宣勅を奉して入唐したる

僧最澄歸朝し、延暦廿四年八月、徒弟を聚め、此寺に於て、桓武天皇の御爲に、毘盧遮那の秘法を修す、空海亦其中にあり、共に灌頂三摩耶戒を禀く、是れ卽、本朝灌頂法の嚆矢たり、其後寺門荒廢に赴きしを、仁安元年、文覺上人來りて、再興を企つに至り、官武の歸依甚深く、諸國の領地を寄すること少からず、壽永元年功成るを得たり、其後應仁の幾亂を經て、再ひ寺領を失ひ、豐臣德川二氏に到りて、稍々保護する所ありしも遂に舊觀を見るを得ず、塔頭寶塔、灌頂、瓔玉、普賢、地藏、曼陀羅諸院の如きも、維新に前後して、皆廢絕す、然るに頃年、住職、高幡龍暢大に再興を策し、殿堂稍舊に復するに到れり、

金堂、講堂、五重塔、八幡宮祠、鐘樓、其他の堂宇、觀るべきもの少なからず、殊に鐘の銘、最も著れる、

愛當之山。神護之寺。三寶既備。六度無虧。唯所有梵鐘。形小音窄。故禪林寺少僧都眞紹和尙。始發弘願。有心改鑄。鎔範未成。衣裓早化。檀越少納言從五位上。和氣朝臣彝範。倬和尙之遺志。尋先祖之舊蹤。以貞觀十七年八月廿三日。雇治工志我部海繼。以銅一千五百斤。合鑄成焉。恐年代久遠。後人不知。仍記於鐘側。右小辨稱朝臣廣相詞

銘一首八韻

傳音在器　證果惟因　爾祖初業　厥孫幸遊
宿昔三尺　今日千斤　体有寬窄　功無舊新
山聲萬歲　谷響由旬　聞宣覺夢　扣卽皈眞
慈周世界　感及非人　雕琢懸趣　蒙叟當仁

參議正四位下勘解由長官兼式部大輔播摩權守菅原朝臣是善銘

從五位下圖書頭藤原朝臣敏行書

託跡男山號八幡。慶雲深處感應繁。神遊遠聘不忠好。吾亦金烏常照孫。獻于高雄八幡廟惟高
高雄古寺幾星霜。洛客看楓日々忙。檐雨添花紅葉色。路通明惠上人房。高雄看楓天隱

和氣清麿を祀れる、護王神社は、近年京都に移せしも、今猶其跡を存す、

近年觀楓の絕勝と稱して、人々の集る處は、卽ち塔頭地藏院の廢墟なり、斷崖千丈の下に潺湲たる、渭湖川を夾みて、東西両岸の楓紅、杉綠相映じ、人をして覺ゆす、美絕麗絕を三呼せしむ、

偶遊神護寺。盡日憩幽扉。山色錦屏繞。溪流玉帶圍。深林聽鳥語。幽谷看雲飛。並欲忘塵世。誅茅傍翠微。明人一菴

文覺上人、神護寺に住せし頃、西行法師尋ね來り、両人の間に、一場の活劇を演じたり今、井蛙抄といへる書に載せられたる全文を掲げなんか、

文覺上人は西行をにくまれけり、其故は遁世の身とならは、一筋に佛道修行の外不可他事敷寄をたてゝ、こゝかしこに、うそふきありく條、にくき法師なり、いつくにても見おひたらは、かしらを打わるへきよし常のあらましにて有けり中略或時高尾法花會に西行まいりて、花の陰なとなかめありきける、弟子とも是かまへて、上人に云らせしと思ひて、法花會もはて坊へ歸りけるに、庭に物申候へんと云人あり、上人誰そとといれたりけれは西行と申者にて候、法花結緣のために參て候、今は日くれ候、一夜此御庶室に候へんと參て候と、いひけれは、上人うちにて手くすねを引て、おもひつる事叶ひたる体にて、あかり障子をあけて、まち出けり、しはしまもりて、これへ入給へとて、入て對面して年頃承及ひ候、見參に入度くつる、御尋悦入候よりなと、ねんころに物かたりして、非時なと饗應して、次の朝又齋なとすゝめて歸されけり、弟子達手を拳つるに無爲に歸ぬる事悦ひ思ひて、上人へさ一も西行に見あひたらは、かしら打わらんなと、御わらまい候ひしに、殊に心閑に御物語候つる事、日來仰にはたがひて候と申けれは、あらいふかひなの法師ともや、あれは文覺にうたれんする物のつらやうか、文覺をこそうたてんする者なれと申されける、下略

清瀧權現祠

高雄の山下に在り、傳云、弘法大師唐朝の背龍權現を奉して歸り、此に物請し、以て永く高雄山の鎮守となせしとなり、

槇尾山西明寺

弘法大師の上足、知泉法師の開基にして、本尊釋迦佛を安す、建治年間、泉州槇尾山自証上人の再興せ一より、久しく廢絶せしを、慶長年中明忍律師、之を復興せり、然るに永祿の頃、又兵燹に罹り、堂宇悉皆烏有に歸す、而して今の建物は、永祿十二年、德川桂昌院の寄進再興せしもの也、此地高雄山の背面に屬し、楓錦絢爛の景を欠くと雖も、幽邃閑寂自ら塵寰を脱す、

明忍律師小傳

明忍字は俊正、中原氏權大外記康綱九代の孫なり、七歳にして高雄山晉海僧正に從ひ諸典を習讀し、二十一歳にして出家す、是より諸國を遍歴し、古聖の遺蹤を尋ね、先賢の勝軌を履む、慶長七年、居を槇尾に徙し、更に智泉師の高蹤を追て、槇尾山に移る、此時、西明寺は荒く荒廢に屬せ一を、師の僧正、律師の志を感し、之を葺修して棲ましむ、其後、喜捨の淨財漸く集り、再ひ佛殿僧坊を建營するを得たり、慶長十五年六月七日寂す、

栂尾山高山寺

槇尾山の三町奥にあり、本尊盧舎那佛運慶作

初め梅尾山と稱す、後、栂尾と改む、舊と天台宗比叡山、法性房尊意の開基にして、高雄山神護寺に屬する、華嚴の靈跡たりしも、堂閣いつしか荒廢、梵鐘響斷たり、其後、建永元年十一月、後鳥羽院々宣を下し、此地を以て高雄文覺上人の上足、明惠上人に賜ひたるより、佛日再ひ影を留め、法雨重ねて霑ひ、伽藍僧坊又復舊す、後堀川院の御時寛喜二年閏正月、更に太政官符を下し、寺域を定め給ふ、其後、承久應仁の變亂を經て寺門漸く衰替し、堂塔伽藍及塔頭諸坊、廢滅に歸するもの多く、以て明治維新に至りしを、現住土宜法龍、寺中の一堂たりし、石水院を修理し、稍復興するを得たり、石水院は、舊と後鳥羽法皇の別宮にして、加茂にありしを、貞應年間、此に移されたるもの也構造の簡古、最も愛すべし、又此寺には、古器靈寶を藏する事、甚だ多く、夫の春日住吉二神の尊影の如き、實に希世の傑作なりといふ、

對山の楓歸、炳然として、杉葉の碧綠に映し、清瀧の溪流、潺々として麓に聲あり、其風色高雄に勝るあるも劣るなし、

偶訪高山寺秋風古意長僧宮有成壞世事任興亡舊碧荒苔雨新紅落葉霜休催計皈路城裏高塵黄 五鳳集

秋深楓塢雨浪々不見飛鴉映夕陽昨日添花今打葉地連明惠上人房 梅溪集雪嶺

よゝをへてにこりにーみし我心清たき川にすゝきつるかな 入道前攝政

清瀧やせゝの岩浪高を山人もあらしの風を身にしむ 高辨上人

明惠上人小傳

上人、名は高辨、姓は平氏、紀州在田郡の人、父名は、重國、宿直の侍なり、高辨承安三年正月を以て生る、容貌端麗、四歲の時父戲れに、烏帽を冠らせて、曰、嘻此好兒、早く長して、仕途に登さんと、時に兒、私かに念らく、我の望む所、僧儀に在り何ぞ官屬を要せん、如かず、美貌を毀損せんにはと、卽自ら庭下に投し、或は火燼に近つき、臂を燬傷す、九歲にして、父母歿す、乃ち高雄山に登り、文覺上人に從ひ、俱舍頌を讀むに、忽ち之を諳んず、常に群兒と遊戲せず、十歲密乘を聞き、悉曇章を習ふ、十三歲苦行を修し、夜潛かに墓所に至て、止宿す、十六歲にして剃髮し、東大寺の戒壇に於て受戒す、十九にして興然阿闍梨に從ひ、兩部灌頂の密法を稟け、遂に梅尾山の靈跡に留り、盛に賢首宗を唱道す、山中の巖窟に於て一宇を搆へ、常に佛眼明妃の法を修し、又不動法を修す、應驗著し、一日耳を截りて、佛前に供す、流血淋漓、其色久しく變せず、承久の亂、官軍此山中に遁る、北條泰時兵を率ゐて、此山に

迫り、上人を捕へんとす、上人泰時を叱し、説くに順逆の理を以てす、泰時其高德を敬服し、兵士の亂妨を禁ず、承元二年紀州に還り、内崎山に於て、一伽藍を創建す、四年又栂尾に返る、寛喜三年十月十九日、彌勒佛名を唱て寂す、享年六十、

栂尾の茶山

本邦、茶の溢觴は、實に此地に發す、蓋し我邦上古より茶なきに非す、宮中に於ても、挽茶の節會など、ありしにても知るべし、然れども之を栽培し、精製せしは、實に建久二年明庵禪師、宋より茶實を齎し歸朝し、明惠に贈りたるを以て始とす（是より先、筑前背振山に植えしとも云）上人乃ち此山中の深瀨と稱する處に植へ、梅山の茶として、其名海内に高し、其後漸く蕃殖して、遂に宇治信樂等にも、移植せしものなり、

くもるなり雨ふらぬ間につみておけ栂尾山の春の若草　明惠上人

幾重峰轉又谿廻。行到茶山一睡眠開。佛殿東房小樓上。夢窓清拙記二同來一。（龍巖円）

都はゐぬい　終

拇尾山
高山寺
白雲橋
祖尾山
西明寺
神護寺
高雄山
三尾谷橋
三

三日坂
平岡八幡宮
三宝寺
法藏寺
泉谷
五智山
村上天皇御陵
八十八ヶ所
龍安寺
金閣寺
衣笠山
北野社
小松原
大根焚
妙光寺
西谷
福王寺社
鳴滝
御室
仁和寺門跡
奥谷
廣澤池
文德天皇御陵
光孝天皇御陵
大將軍社
紙屋川
御室川
丹波道
中道

二條城
内
中野
常盤
桂宮院
太秦廣隆寺
木嶋
安井
井波
帷子辻

跋

編考双渓序のあるし姓は小林名は吉昭称名は樓陰
ゝ代〻上総国に住て父母ゝ孝行なれしこと
父歿しのち三年ゝ農業を捨て墓を守りしも
古典をいとなみ孝道を尽すなるべし古地の
ためは世に多くなりゆくゆえ小説も知るべき
ものゝ風雅のゝゝ篤く家業の戸を打
叩くゝゝ世俗の俗気を去ることゝ
年あり絵言をいへる如く前に渓先名称の

一小冊ど著し今又此集を編く世人のかたり
ぐさもおもしろし此ん入篇実とゆかなしい
まゝ〳〵性辛のつゝゆゑなくかゝる振
舞いと知そ命しと宣ふ言こゝてたゝ
ものゝ名誉の為の
ゝ武士と柳條

双湖房肥金

略かつや又ゝ名もうしゝ　全
初ゝあゝれ

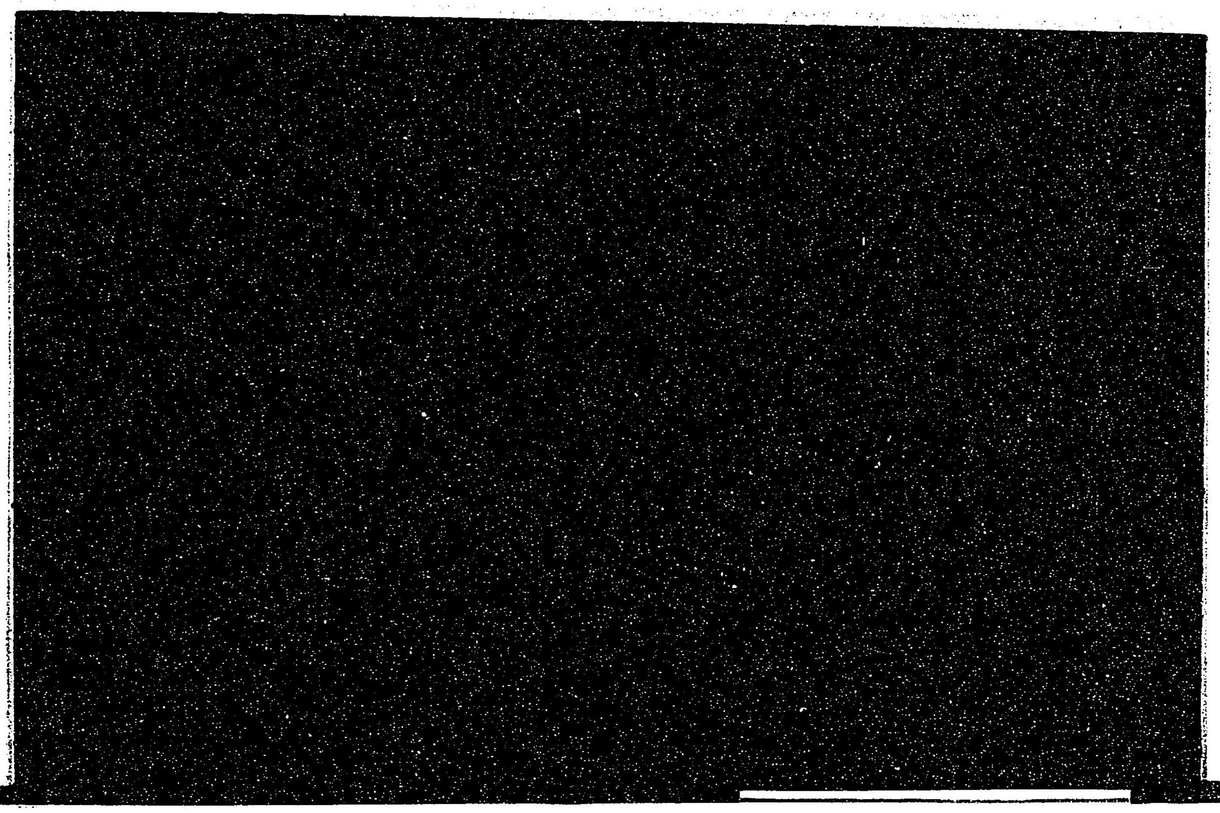
明治廿九年三月三日印刷
仝　年仝月十日發行

（定價貳拾錢）

京都府葛野郡嵯峨村字上嵯峨
百三十四番戸
編輯者　小林吉明

京都市上京區烏丸通三條上ル
場之町三十三番戸
發行者　山鹿象次郎

京都市上京區烏丸通三條上ル
場之町三十三番戸



特 22
317

都のいぬゐ

国立国会図書館

025678-000-8

特22-317

都のいぬゐ

小林 吉明／編

M29

ADC-3200